

## 九州大学百年史 第8巻 : 資料編 I

九州大学百年史編集委員会

<https://doi.org/10.15017/1448763>

---

出版情報 : 九州大学百年史. 8, 2014-05-30. Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

## 第二編

### 九州帝国大学の創立



## 第一章 九州帝国大学創立への動き

### 第一節 工科大学設置問題

九九 原敬日記―古河家より大学建築寄附について―

十一月

〔原敬日記〕

〔中略〕

十七日 東北大学其他に關し牧野文相來訪内談せり、財政の都合にて東北大学、札幌農科大学、九州理工科大学ともに大蔵省の削減に遭ふて困難する由に付、兼て古河家に於て公共的献費の企も之ありしに因り新營費を支出して献納せしめんと考あり、且つ此際大学設立尤も必要に付文相に兼て内議し置きたる為めなり、此献納あれば始めて大学の設立を見る事にて国家の為めにも甚だ利益なりと信じたるなり。

〔中略〕

三十日 井上を訪ふて古河より大学建築寄附の事を相談して同意を得たり、近來富豪より種々の寄附を出すものあり、授爵などの魂胆もあらんが、兎に角右様の次第故古河も此儘に打過ぎては世間の非難を免がれざる事に付、兼て公共的に相当の寄附をなすを得策と

考へ、古河重役、戸主、陸奥等にも内話せし事あり、然るに今回文部省は仙台東北大学、札幌農科大学及び福岡工科大学を設立せんとし、大蔵省の査定により削減せられ殆んど絶望の姿なるにより、之を建築して寄附するは国家の為めにも古河家名譽の為めにも甚だ喜ぶべき事に付、陸奥始め重役等に内議し、牧野文相にも内々相談して同意を得、遂に井上に相談したるなり、井上至極適當なりとして快諾せり。

定例の閣議に出席せり、重要事項なし。

十二月

一日 古河鉱業会社庶務課長昆田文次郎を同伴して牧野文相を訪問し、文部省會計課長にも紹介して古河家より大学建築寄附に關する打合をなしたり、夜に入り木村、岡崎兩人來訪して文部省會計課長の示したる寄附の案文に付相談ありたるにより、其案文を修正、一切無条件にて文部省の計画通建築し指定の年限内に落成する事の出願をなし、文部省は之に対して詳細の命令書を下附する事に改めたり、多分明日中に内相談を纏め明後日は公然の手續をなすに至るべし、甚だ美筆なりとして文部省に於ては十分の厚意を以て之を迎へたり。

〔中略〕

四日 (中略)

古河家より各大学建築寄附の件は牧野文相より閣員に報告して是認を得たり、但し寺内は寄附に因て大学を増設する如きは考ものと云ふが如く、例の小理窟らしき事を云ひたるも強て異議も主張せざりき。

(中略)

六日 古河家より出願せし福岡、仙台、札幌大学建築寄附の件文部省より公然許可ありたり、去四日の閣議にて決定せしものを昨日まで公然許可の指令をなさざるにより、昨夕文相に兼て内約通り直に許可ありたき旨催促せし結果本日公然の手續をなしたり、依て陸奥伯並に古河虎之助に電報を發送せしめたり。

一〇〇 工科大学設置を要望する福岡県会決議

(明治三十九年福岡県通常県会決議録)

第二十二号議案

来ル明治四十年年度ニ於テ本県内ニ工科大学ヲ設置セラレ尙ホ将来法文理科等各分科大学ヲ同一箇所ニ設置セラレンコトヲ要望スル趣旨ヲ以テ国庫ニ対シ左ノ寄附ヲ為スモノトス

一金式拾五万円

但明治四十一年度ヨリ同四十四年度ニ至ル四ヶ年度間ニ各金六万

式千五百円宛支出スルモノトス

一土地凡六万坪

但土地代金ハ福岡市ノ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ

明治三十九年十一月 日提出

福岡県知事 河島醇

右原案ノ通り決定

一〇一 工科大学設置に関する衆議院予算委員第一分科会質疑

(第二十三回帝國議會衆議院予算委員第一分科會議録)

第三回 一九〇七(明治四〇)年一月三日

會議

明治四十年一月三十一日午前十時四十分開議

出席委員左ノ如シ

大淵 龍太郎君 古井 由之君 根本 正君

奥野 市次郎君 粕谷 義三君 石田 仁太郎君

佐藤 庫喜君

兼務

宮崎 榮治君

出席國務大臣左ノ如シ

文部大臣 牧野 伸顯君

出席政府委員左ノ如シ

文部次官 澤柳政太郎君 文部省実業學務局長工學博士 眞野文二君

文部省専門  
学務局長 福原鎌二郎君 文部書記官 松村茂助君

本日ノ会議ニ上リタル議案左ノ如シ

明治四十年度歳入歳出総予算案（文部省所管）

○主査（大淵龍太郎君） 是ヨリ文部省所管ノ分科会ヲ開キマス

〔中略〕

○佐藤庫喜君 此臨時部中ニ東北帝国大学、其他女子高等師範学校、農林学校等ノ各学校ノ設備費ヲ継続年度ニ依ツテ計画サレテ居リマスルガ、是ハ其位置ハ判明シテ居リマセヌカ、其場所ノ御説明ヲ煩シタイ、尚ソレニ付イテ何レ経費其他ノ事モ、土地ノ寄附トカ何トカ是マデ御調査ニナツタヤウニ聞イテ居リマスガ、其辺ノコトモ分リマスル丈御説明ヲ願ヒタイノデス

○政府委員（松村茂助君） 工科大学ハ福岡ニ、ソレカラ理科大学ハ仙台、農科大学ハ札幌、第二高等女子師範学校ハ奈良、第二高等農林学校ハ鹿児島、第五高等商業学校ハ小樽、第六医学専門学校ハ新潟、第七高等工業学校ハ米沢、是等ノ箇所ニ置ク筈デアリマス、寄附金ノコトハ、工科大学ニ付イテハ家ノ大部分ハ個人カラ寄附スルコトニナツテ居リマス、サウシテ此予算ニ上ツテ居ル二十九万二千五百六十四円ノ中、其工事ノ寄附ニ係ル建築ノ監督費ヲ除イタ外ノ二十五万円ト云フモノガ、福岡県ノ寄附ニ係ルモノデアリマス、尚福岡県ニ於テハ其外ニ敷地三万余坪ヲ寄附スル筈デアリマス、又仙台ノ理科大学設置ニ付イテハ、詰り個人ノ寄附ガアリマシテ、其

寄附ニ依ツテ建物ガ出来ル、サウシテ敷地ハ現在文部省ガ有ツテ居ルモノヲ使ヒマスシ、後ノ設備ニ要スル費用十五万円ト云フモノヲ、県カラ寄附スルコトニナツテ居リマス、農科大学ニ付キマシテハ、是モ建築ハ前ノ工科大学医科大学ト同様ニ、個人カラ寄附スルコトニナツテ居リマシテ、サウシテ其設備費ト云フモノガ十万円、札幌区カラ寄附ニナルコトニナツテ居リマス、第二高等農林学校設立費ノ中十万円ト云フモノハ、是ハ鹿児島県カラ寄附スルコトニナツテ居ル、ソレカラ第五高等商業学校、二十万円ト云フモノハ全部小樽カラ寄附スルコトニナツテ居リマス、而シテ其敷地ハ小樽ノ有志者ノ中カラ寄附スル筈ニナツテ居リマス、第六医学専門学校創立費三十七万円モ、ヤハリ全額是ハ県ト市デ寄附スルコトニナツテ居リマシテ、外ニ敷地一万七千坪ト云フモノモ亦寄附スル——ソレカラ第七高等工業学校ニ付キマシテハ、県ヨリ十万円ノ費用ヲ出シマシテ、敷地二万坪ト云フモノヲ米沢カラ寄附スルト斯ウ云フコトニナツテ居ル

〔中略〕

○根本正君 簡單ニ一ツ伺ヒタイ、此福岡ノ工科大学ノコトガ出テ居マスガ、福岡ハ石炭ガ出テ、最モ工業地ニハ適當シテ居ルコトハ認メテ居リマス、併シ工科大学ニハイロ／＼ノ種類ガアルノデスガ、此福岡ニ設ケラル、トコロハ、工科ノ中デモ或ハ特ニ専門ノ工科ヲ置クカ、或ハ一般ノ工科ヲ御置キニナルカ、二十五万円ノ経費ハ一

部ノコトニナツテ居リマスガ、之ヲ置カレマスト、後來ノ経費ト云フモノハドウ云フ風ニナルカ、其辺ヲ一ツ伺ツテ置キタイ、又此別ニ仙台ニ置カレルトコロノ大学デアリマスガ、此仙台ニ置クコトガ若シ成立チマスレバ、モウ殆ド学校トシテ無<sup>マ</sup>ナイモノハナイト云フヤウナ風ニナツテ、日本全国ノ中デモマダ人口モ多ク都トモ称セラ<sup>ラ</sup>ル、地ニ、学校ガ設備ニナラヌ所ガ幾ラモアル、曾テ文部省デハ先年秋田ニ高等学校ヲ置クト云フ計画マデ、ナクトモ、其事ガソレノ計画ニナツテ居タヤウデスガ、従来高等学校ト云フモノヲ秋田地方ニ置クヤウナ御計画ガアルノカ、又或ハ仙台地方ニ斯ウ云フ風ニ集メテシマウカ、其ノ辺ノ御計画ガアラウト思ヒマスカラ、其辺ノコトヲ伺ツテ置キタイト思ヒマス

○政府委員（澤柳政太郎君） 福岡ニ置キマス工科大学ハ、今日ノトコロデハ其学科ハ土木科、器械科、電気工学、応用化学、採鉱冶金、斯ウ云フヤウナ学科ヲ設ケル積デアリマス、此等ノ学科ヲ置キマシテ工科大学トシテ完成致シマシタナラ、工科大学ノタメニ政府ノ支出金ハ、約十万円アリマシタラ宜カラウト云フ積デア居ルノデス、ソレカラ仙台ニ置キマス理科大学ハ、是モ今日ノ計画デハ、物理学、化学、地質、数学、此ノ四学科ヲ置クト云フ積デアリマス、是ニ要スル所ノ費用ハヤハリ年々政府支出金ガ六万円程アツタナラ宜カラウト云フ積デアリマス、ソレカラ従前秋田ニ高等学校ヲ置クト云フ計画ガアツタカドウカト云フコトデスガ、ソレハサウ云フ計画ハナ

カッタノデアリマス、将来仙台ニ悉ク学校ヲ集メルカト云フコトデスガ、仙台ノ東北大学ト致シマシテハ、他ノ大学モ仙台ニ発達シテ成立ツコトヲ希望シテ居ルノデス、是ガ各種ノ学校ヲ悉ク仙台ニ集メルト云フ考ハ持ツテ居ラヌノデアリマス

○主査（大淵龍太郎君） ソレデハ尚御質問デアリマスレバ、午後一時カラ開クコトニ致シテ、暫時休憩致シマス

午後零時十五分休憩

午後一時二十一分開議

○主査（大淵龍太郎君） 是ヨリ開会致シマス

○根本正君 午前ニ引続イテ伺ヒマス、福岡工科大学ノ費用ハ、後來十万円掛カルト云フコトハ分リマシタガ、学校ハ、位置ガ大切デ、英国ノ「ケンブリッジ」ニ往ツテモ、「オックスフォード」ニ往ツテモ、学校ハ一ツ所ニ纏ツテ居ル、一ツ所ニ纏ツテ居ルト、第一教員ノ交通ノ便利、第二図書館モ一ツ所デ済ムノデアアル、幸ニ福岡ニハ医科大学ガアリマス、シテ見ルト工科大学モ段々アノ地勢ヲ開イテ見ルト、人口カラ言ツテモ場所カラ言ツテモ、無論東部ノ方ニ置カレルノガ適當デ、既ニ其御計画ト思ヒマスガ、念ノタメニドウ云フ御計画ニナツテ居リマスカ、一応伺ツテ置キマス、又工科大学ヲ設置スルニ付イテ段々承リマス所ニ依ルト、古川家カラ寄附金ガ文部省二百六万円アルト云フコトヲ聞イテ居リマスガ、此金ガ若シモ

アル場合ニハ、何処ノ工科大学ニ幾ラト云フヤウナ風ニナツテ居リマスカ、此二点ヲ伺ツテ置キマス

○政府委員（澤柳政太郎君） 福岡工科大学ヲ設立スルニ付イテ、福岡県カラ土地ヲ寄附スル、其候補地ハ二ヶ所アリマス、其内ノ一ヶ所ハ現存シテ居ルトコロニ接近シテ居リマス、若シ両方ノ土地ガ同ジ状況デアリマスレバ、無論医科大ニ成ルタケ接近シタ方ガ宜シイト思ヒマスガ、併シ候補地ニ付イテハ、文部省ハ少シモ今迄調査シタコトハアリマセヌノデ、愈々予算デモ決定シタナラバ、実地ヲ見テ工科大学トシテ最モ適当ナ地ニ定メタイ積デアリマス、ソレカラ第二ノ古河家カラノ寄附ハ、ソレ／＼東北、九州、札幌ノ三ヶ所ニ分ツテ寄附サレルコトニナツテ居リマス、其金高ハ会計課長カラ申スコトニ致シマス

○政府委員（松村茂助君） 工科大学ガ六十五万〇六百十四円、理科大ニテ二十六万二千二百六十二円、農科大学ガ十四万五千円デアリマス

○根本正君 唯今ノ御説明ニ拠ルト、福岡工科大学ノ位置ト云フモノハ同ジ状況ナラバ、私ノ見込ノ通、医科大ニ接シテ建テラレルガ、併シ状況ガ違ツタナラバドウナルカ知ラナイト云フ、少シ判明シナイ所モアリマスガ、是ガ大切ナルコトデアリマス、既ニ先刻荻野君ガ高等学校ニ付イテ御質問ガアリマシタガ、始め少シバカリノ金ノタメニ、或ハ其他ノコトノタメニ後來永久変ラナイトコロ

ノ、此事業アアツテ見マスルト云フト、金ガ少シ寄附ガアツタカ、或ハ此所ガチト土地ガ広イトカ云フ、僅ニ一時ノ事ノタメニ、後來子々孫々ノミナラズ、日本帝国ノ一般ノ教育事業ニモ關係スル大事業ガ、寄附ノ行為ニ依ツテ、其位置ヲ変更スルト云フヤウナコトガアルト、誠ニ惜ムベキコト、思フ、故ニ私ハ既ニ申シマシタ通、外国ノ例ヲ見マシテモ、位置ト云フモノニ付イテハチヨツト十萬円トカ、或ハ土地ガ一町歩多イトカ云フトデ、若シモ一朝誤ルト、是カラ教授ノ通フ場所、寄宿所ノ都合、図書館等ノ都合ガ悪イト、一箇年ノ利子ガ千円多ク取レルヤウニシテモ、片々ノ方デ一万円モ減ルヤウニナルト大變損ニナリマスカラ、福岡ノ如キハ工科大学ガ建ツト云フトガ極ツタ以上ハ、医科大ニ接近シテ東ノ方ニ置カレタ方ガ最モ公平デ、又利益デアルト思ヒマスカラ、念ノタメニ一応申上ゲテ置キマス、ソレカラ工科大学ニ寄附スル金ハ六十五萬円ト云フトデスガ、是ハ福岡ノミナラズ一般ノ工科大学ニヤルノデスカ

○政府委員（松村茂助君） 福岡ニ工科大学ヲ建築スルニ付イテ、建築費トシテ六十五萬円出スノデス

○根本正君 大学独立ノコトハ、先刻大臣カラ御説明ニナツテ別ニ予算ガ出ルト云フトデスガ、其時御尋シテモ宜シイノデスガ、ソレマデ研究スベキコトガアリマスカラ一応伺ヒマスガ、本会デモ伺ヒマシタガ、唯金勘定会計ダケヲ独立セルノデアルト、独立ノ本旨

ニ余リ近寄ラナイト思ヒマスガ、ドウ云フ点ガ利益ニナツテ居リマスカ、其利益ノ点ヲ伺ツテ置キマス

○文部大臣(牧野伸顯君) 工科大学ノ位置ノ事ハ、其以上ノコトヲ述フルコトガ出来マセヌカラ、左様御承知ヲ願ヒマス、十分調査スル積リデアリマス

(中略)

○宮崎榮治君 私ハ四十年ノ文部省ノ予算ヲ見マスルノニ現大臣ノ御熱心ノ余リト見エマシテ、頗ル創立ノ学校ガ多イヤウデゴザイマス、実ニ私共ハ何レノ予算ヲ見マシテモ賛成シナケレバナラスト考ヘマス、唯遺憾ニ存ジマスルノハ他ノ省ノ所管ニ付キマシテモ、或ハ鉄道事業ナリ、或ハ電信電話、或ハ河川ト云フモノニ就キマシテハ、戦時中ハ中止致シテアツタコトヲ大概今日ハ復旧スルト云フヤウナコトニ至ツテ居リマス、然ルニ文部省ノ予算ニ於キマシテハ他ノ教育基金ノ如キカ回復ノ出来マセヌノガ、誠ニ遺憾ノ事デアルト存シマスノデ、過日予算總會デゴザリマシタカ一通リ大臣ノ御説明ヲ拝聴致シマシタガ、アノ事ニ付キマシテハ前途ドウ云フ御都合デゴザリマスカ、限りナク何時マデモ教育基金ト云フモノガアツテモ復旧スルコトガ出来マセヌカ、ソレヲ一ツ伺ツテ置キマス、尚斯ク申シマスレバ地方ノ感情カラ御尋申上ゲマヌヤウデゴザリマスガ、決シテサウデナイ、段々先刻カラ御話ヲ承リマス、第二女子高等師範学校ノ位地ノ如キモ地方デアチコチ其場所ヲ望ンデ居リマスル

ニ拘ラズ、当局者ニ於テハドチラノ見込デアルト云フコトヲ慥ニ御答ゴザリマシタノハ、誠ニ感心ナコトデアルト思ヒマス、然ルニ独リ工科大学ノ創立ノ場所ハ、福岡デアアルニ拘ラズ、是ハ一地方内ニ二ヶ所ノ候補地ガアルト云フコトニ付イテ、其何レニスルト云フコトノ御判断ガ今日此案ヲ御出シニナル迄ニ附イテ居ラヌコトハナイト思ヒマスガ、其辺ヲ親切ニ明ニ御話シ下サツテハ如何デゴザリマセウカ、私共ハ大体此費用ニ付イテハ反対ノ意見ハ更ニアリマセヌガ、当局者ニ於テモ総テ御説明ヲ相成ルベクハ他ノ場所同様ニ秘シナサル必要ハアルマイト思ヒマスカラ、公然御示シ下サツタ方ガ宜カラウト思ヒマス、此点ヲ併セテ伺ツテ置キマス

○文部大臣(牧野伸顯君) 教育基金ノコトハ、政府ニ於キマシテ其事柄ニ付イテ敢テ異存ガアル訳デナイ政府全体カラ云フト一日モ早く復旧シタイ考デアル、唯是ハ財政ガ一千万円ノ財源ヲ今作ルト云フコトガ困難ナルタメデアリマスガ、是モ復旧シタイト考ヘテ居リマス、ソレカラ福岡大学ハ福岡市ニ於ケル市内ノ位地ヲ明カニ示セト云フコトデアリマスガ、極ツテサヘ居レバ少シモ隠スコトハナイガ、全ク極ラヌ少シモ包ミ隠スノデナイ、何等ノ事情デモナイ、全ク当局ニ於テモ何レガ宜シイカ極メ兼テ居リマス、ソレハ丁度予算ヲ編成スル始ド二三ガ出来マシテカラ二ツノ位地ガ出来マシテ全ク極マル余裕ガゴザイマセヌノデ、外ニ事情ハアリマセヌ、内定サヘモシデアリマセヌ

○宮崎榮治君 ドチラガ学校ノ要件ニ適ウテ居ルノデアリマスカ、決定ハ致シテ居リマセヌデモ、学校ノ用地ヲ御定メニナリマスルニ付イテハ、是々ノ要件ガ具ツタモノガ一番宜イ、其要件ガ残ラズ具備シナクテモ、比較的要件ニ能ク中ツテ居ルト云フ方ノ、何レ比較ヲ御取りニナツテ、サウシテ御決定ニナルコトデアラウト存シマスマガ、其辺ハマダ御調査ニナツテ居リマセヌカ、實際ノ要件ノ御調査ガ無イト折角予算ヲ決シテモ、或ハ福岡県ニ工科大学ヲ置カレナイト云フ場合ガ無イトモ云ヘマセヌノデ、甚ダ私共……

○文部大臣(牧野伸顯君) 福岡市ト云フコトハ定ツテ居ルノデアリマスガ……

○宮崎榮治君 福岡市ノ市内ニ限リマスカ

○文部大臣(牧野伸顯君) 市ト及ビ附近デスケレドモ、市ニ接近シタ所デアリマス

○宮崎榮治君 私共ハ彼ノ地方ノ者デモアリマセヌケレドモ、競争ガアルト云フコトヲ承ツテ居リマスガ、一ヶ所ハ今ノ現大学ノ近所ニ、良イ土地ガアルト云フコトヲ承ツテ居リマス、又一ヶ所ハ今ノ大学カラ殆ド二里以上モ離レタ所ニ、希望スル所ノ一部分ノ人民ガアルト云フコトヲ承ツテ居リマス、ソレ故ニソコラ辺ハスル予算マデモ御発シ遊バサレルコトデアリマスカラ、御調査モ進ンデ居ルト考ヘタノデアリマス、場所ヲ定メマスコトニ付イテハ、政府デ為サルコトデゴザイマセウケレドモ、ソレニ付キマシテハ相当ナ、ソレ

〳 比較ヲ立テ、御定メニナツテ居ルコトデゴザイマスレバ、何等ソレニ付イテ御注文ガマシイコトヲ申上ゲル筈ハゴザイマセヌガ、予算ヲ議スルニ付イテソレ等フ伺ヒマスノハ相当ト信ジテ、実ハ推シテ何フノデアリマス、若シ場所ガ御決定ニナツテ居リマセヌケレバ、凡ソドウ云フ要件ガ具ツタ所ヲ以テ、相当ト認メルト云フコトヲ、独リ工科大学ニ限ラズ、伺ヘ得ラレルナラバ仕合デアリマス

○政府委員(澤柳政太郎君) 要件ト申シマシテモ、サウエライムヅカシイコトモアリマセヌノデ、是等ハ県ノ方ニ於テモ県立学校ヲ設置シマスル場合ニ於テ、ドウ云フ地方ハ学校ニ適當デアルト云フコトヲ考ヘテ居リマスノデ、或ハ甚ダ不調査デアルト云フ御考ガアルカモ知レマセヌガ、県カラシテ土地ヲ寄附スルコトニ就イテハ、凡ソ見当ガアルデアラウカラ、其学校ノ敷地トシテ適當ト思ハレルヤウナ候補地ヲ言ツテ貰ヒタイト云フコトデ、県ノ方ヘ通ジマシタノデス、ソレデ福岡県カラハ二ツノ候補地ガアル、一箇所ハ在来ノ医科大学ニ接近シタ所デアアル、一箇所ハ文部省ノ承知致シテ居ルトコロデハ、一里少シ離レタ所デアアルト云フヤウニ承知シテ居リマス、ソレダケノコトデアリマスノデ、其以上ノ事ハ実地ヲ視察シタ上ニ於テ、最モ適當ナ方ニ文部省トシテハ定メタイト云フ考デアリマス、是ハ独リ福岡ノ工科大学バカリデアリアマセヌ、例ヘバ小樽ノ高等商業学校ノ如キハ、数箇所ノ候補地ガアルノデアリマス、新潟ノ如キモ候補地トシテチャント定ツテ——稍々定ツテ居ルノガ二箇所

程アリマス、或ハ其他ノ場所デモ文部省デ適當ト認メル所ガアツタナラバソレニ決シヤウト云フコトニナツテ居リマス、仙台ノ如キ奈良ノ如キハチャント確定シテ居リマスケレドモ、其他ノ学校ニ付テハマダ丁度福岡ト同ジ様ナ状況デアリマス

○宮崎榮治君 尚伺ヒタウゴザイマスガ、献納金ニ付キマシテハ総テ政府ニ金ヲ献納シテ、当局デ相当ニ御支払ニナルモノデアルカ、又寄附者ト政府ノ間ニ条件デモ附イテ居リマスレバ、其辺ノコトヲ伺ヒタイ

○政府委員（松村茂助君） 寄附金ハ現金デ政府ニ寄附スル分ト、ソレカラサウデナイ分トアルデス、詰リ先程説明致シマシタ個人ノ寄附デス、建物ヲ寄附スル分ハ現金ノ寄附デナイ、其他ノ分ハ総テ現金ヲ以テ寄附スルコトニナツテ居リマス

○宮崎榮治君 献納者カラ条件ト云フヤウナ……

○政府委員（松村茂助君） 条件ト云フヤウナモノハ一ツモアリマセヌ

〔中略〕

○主査（大淵龍太郎君） 大抵質問モ尽キタヤウデアリマスカラ、是デ一通リ質問ガ了ツタコトニ致シマス、次ノ時日ハ公報デ御知ラセ致シマス

午後三時五十分散会

## 一〇二 箱崎の祝賀会

〔福岡日日新聞〕一九〇七（明治四〇）年五月二日

○箱崎の祝賀会 福岡工科大学敷地は今回略ぼ福岡市外箱崎町の内字海門通より東北方の畑地及松林を以て之に充つる事に決定せしに依り、同町の有志者にて組織したる期成同盟会は、昨日午後三時より同町汐井場東北方浜辺一帶翠松白砂の間に於て自祝の爲め一般町民と共に祝盃を挙げ箱崎町の万歳を三唱せり。汐井道よりの入口には国旗を交又せる緑門を樹て、幾十の幔幕は松と松との間に張り廻はし、其他種々の裝飾をなし、又同町にては朝来色紙を附したる笹竹を各戸の軒端に立て幔幕を張り、業を休みて祝意を表し、各学校生徒を主として国旗行列を行ひ、七百余名の多数は万歳を唱へつゝ町内を練り廻はり、夜に入りては町内老若八百余名の提灯行列ありて頗る盛況を呈したるが、余興は是のみならず網屋、社領、新町小寺筋等の各町よりは数台の囃台を曳き出し盛んに町内を囃し廻はり、全く絃鼓の音の静りたるは同夜一時過ぎにして、同地近來の賑合なりし。

〔註〕原本句読点なし。

## 一〇三 市起債及償還規程

〔第十二回福岡市会議録〕一九〇七（明治四〇）年九月一六日

市会議案第三六号

市起債及償還規程

第一条 工科大学敷地買収費トシテ本県ニ寄付ノタメ明治四十年

ニ於テ銀行又ハ其他ヨリ金六万五千七百五円ヲ借入ル、モノトス

第二条 市債利子ハ一ヶ年八歩以内トス

第三条 市債元金ハ明治四十年度ハ之ヲ据置キ明治四十一年度ヨリ

三ヶ年以内ニ償還シ利子ハ最初借入ノトキヨリ元金償還ニ至ル迄

ノ間ニ於テ毎年三月九月ノ兩度ニ之ヲ支払フモノトス

但市經濟ノ状況ニ依リ年次ヲ繰上ケ償還スルコトアルヘシ

第四条 市債元金及利金償還ノ財源ハ市税ヲ以テ之ニ充ツ

負債償還年次表

年度	償還元金	利子(年八分)	計
四十年年度	据置	二、六二九円	二、六二九円
四十一年年度	二〇、〇〇五円	五、二五七	二五、二六二
四十二年年度	二一、七〇〇	三、六五六	二五、三五六
四十三年年度	二四、〇〇〇	九六〇	二四、九六〇
合計	六五、七〇五	一一、五〇二	七八、二〇七

備考

明治四十年度ハ明治四十年十月ヨリ四十一年三月迄六ヶ月分、

四十三年度ハ四十二年四月ヨリ九月迄六ヶ月分ノ利子ヲ計上シ、計算上円位未滿ノ端ハ円位ニ切上ケ算出セリ

明治四十年九月三日提出

福岡市参事会

市長 佐藤 平太郎

理由

新設工科大学敷地買収費トシテ金六万五千七百四円参銭八厘以内本県ニ寄付ノ義、曩ニ出願ノ未許可相成タルヲ以テ、右金額本年

度ニ於テ寄付ヲ要スル処、何分巨額ノ金員ニ付、之ヲ一時ニ賦課

徴收スルハ頗ル至難ナルヲ以テ、爰ニ三ヶ年賦償還ノ予定ヲ以テ

起償ノ上支弁ナサント欲ス、之レ本案ヲ提出スル所以ナリ

右原案ノ通可決

(註) 原本句読点なし。

一〇四 福岡医科大学教授林春雄講話

『福岡医科大学雑誌』第一卷第二号

一九〇七(明治四〇)年二月

一体私ガ福岡大学ニ対シテ持ツテアル希望ハ頗、沢山アツテ十指ヲ屈シテモ尚、足りナイ位デアルノデス、今日ハソノ最重要ナリト信ズル者一ヲ述ベテ諸君ノ同情ヲ得タイト思フ。

世ニ近眼トイフモノガアル、随分、不自由ダラウト思フ、又實際不

自由ナノダサウデス、學術ノ進歩ハ是ニ眼鏡ヲ作ツテ与ヘタ、デスカラ今眼鏡ヲカケテヲル者トカケテキナイ近眼者ト喧嘩ヲスレバ前者ガ勝ツノハ当然ナ話デアアルデス、所デ我々ノヤツテル事ハ何デア  
ルカ申スマデモナク医学デアアル、然ラバ医学トハイカナル学問デア  
ルカト言フト人間ヲ研究ノ対象トスルモノデアアル、所ガソノ人間ト  
イフモノハ古人モ言ツタ様ニ其自身既ニ一ノ小天地デアアル、  
microcosmosデアアル、然シナガラコノ小トイヒ、microト言フハ客  
觀的ニ大宇宙ト比較シテノ話デアアル、主觀的ニハコノ egoハ大宇宙  
ニ充滿シテ尚、余リアル程大ナルモノガアルノデアアル、藤田東湖ハ  
天地正大氣粹然鍾神州ト歌ツタガ吾輩ハ天地玄妙理粹然鍾人間ト言  
ハウト思フ、カクノ如キ大イナル egoヲ宿セル人間、ソノ人間ヲ研  
究スル所ノ医学ハ正ニ天地間アラユル事物ニ関シテ研究スル所ノア  
ラユル学問ヲトツテ以テ応用ノ資ニ供セナケレバナライノデアアル、  
然ルニ悲シイ哉ワガ大学ハソレガデキナイ、恰眼鏡ヲカケナイ近眼  
者ニ等シイ否、其ヨリモ更ニ憐ムベキ盲目者ニ等シイ、ワガ大学ハ  
実ニ盲目大学デアアル、何ヲ以テカ盲目トイフ、福岡大学ニハ他ノ分  
科大学ノ併ビ存スル者ガナイトイフ事即是デアアル、前ニモ申シタ通  
リ医学ハ実ニ多方面ノ科学ヲソノ基礎ニオク、然ルニソノ基礎タル  
科学ハ日ニ月ニ進ンデ進ンデ止マズ、科学ニシテ今日若、一  
定不變ナリト言フモノアラバソハ科学デハナイトイフ位デアアル、吾  
人ハ努力シテソノ進歩ノ跡ヲ追ウテ進ミ自己ノ受ケ持チノ分科ヲシ

テ一步ニテモヨリ良キヨリ新シキ地盤ノ上ニ導カウト孜々トシテカ  
メテヲル、然シナガラソノ目的ハ終ニ達セラレナイノデアアル、吾々  
ハ偶然ニモ諸君ヨリ稍、年長デアアルトイフ廉ヲ以テ毎日何カ、マツ、  
オ教ヘヲシテヲル、如何ニモ物識リブツテ、サカシラニ振舞ヒツツ  
何カオシヤベリヲシテヲル、然シナガラ衷心実ニ恥ゾルデス、コン  
ナ事ヲ言ツテ最新ノ学説ニ悖ル所ハナイノカ知ラン、或、知ラズ知  
ラズノ間ニ大イナル誤ヲヤツテ居リハセンカト、是ハ独吾輩ノミナ  
ラズ我輩ノ同僚ノ常ニ齊シク発シツツアル所ノ歎声デス、近眼ナル  
我等ニ眼鏡ヲ与ヘテホシイ、盲目ナル我等ニ目鼻ヲ開ケテホシイ、  
是ハ我輩及我輩ノ同僚ノ常ニ発シツツアル所ノ願望ノ声デアアル、  
吾々ハ今迄ハ幸ニ眼鏡ヲ持テ居ツタ、盲目デモナカツタ、吾々ガア  
チラヘ行ツテ得タル利益ハ実ニ他ノ科学ヲ覺エタ事ニアルノデス、然  
シナガラ科学トイフ大厦ノ造作ハイツ迄モ吾輩ガ覺エタ當時ノ有様  
ニ止ツテハキナイ、常ニ改築セラレ益々増築セラレテ一時モ静カナ  
ル事ガナイ、盲目ナル吾人ハ哀ニモツ柱ニ把住シテ右ニモ行カズ  
左ヲモ顧ミズココニコノ儘ニ朽チ果ツル運命ヲ待タネバナランノデ  
アル、先ニ吾吾ハ福岡ニ理工科大学ガデキルト聞イタ時吾々ノ悦ビ  
ハ実ニ非常デアツタ、其デコソ吾人ノ Facultyハ眼鏡ヲエル、目開  
キトナル、福岡大学ハ Universitätタルノ資格ヲエルト悦ンダ、然  
ルニ幾クモナクシテ吾々ハ再、理工科大学ハ半分セラレテソノ脳部  
東北ニソノナキガラガ福岡ニクル事ニ極ツタトイフ事ヲ聞イタ、何

ヲ以テナキガラト言フカ、曰ハク工科ハ医科ノゴトクニ応用科学デアツテ基礎科学デナイ、基礎科学ナル分科ヲ有セザル工科、医科ト相併ンデ何ニナリマスカ、吾々ハ、メクラガ、メクラノ友ヲエタト言フ淋シキ慰メニ青白キホホエミヲ洩スバカリデアアル、吾人ハ東京ニ行く度毎ニ文部ノ当局者等ニ屢コノ事ヲ訴ヘタ、然シナガラ吾輩ノ如キ若輩ノ言ハ常ニ用キラルル事ナク、例ヲ東京ノ大学ニトツテ医科ハ其程理科文科ノカヲ借ルノ要ハナカラウトバカリ退ケラレテシマフノデス、東京ハ東京デアアル、東京ノ医科ガ大イニ文科殊ニハ理科ナドノ基礎科学ノカヲ利用シテヲラヌナラバ其ハ宝ノ持チ腐リヲシテ居ルノデアアル、総領ノ東京ガ持チ腐リヲヤルカラトテ弟ノ福岡ニハ宝ヲヤラヌトイフ筈ハナササウナモノト考ヘル、只、トニカクニ近キ未来ノ何レカノ日ニトイフ答ヲウルノミデアアル、何レカノ日ニハ甚、心細イ、未来デモヨロシイ近キ未来ノコノ日ニト不定称ノ指示代名詞ヲ定称ニ代ヘシメテ一時モ早ク眼鏡ガホシイ、一時モ早ク目開キトナリタイ、是、予、否、予ノミナラズ予ガ同僚一般ノ希望デアアル。

〔註〕原本に句読点追加。

一〇五 土地収用公告

〔官報〕第七三四一号 一九〇七(明治四〇)年二月一六日

土地収用公告

本年十二月四日内閣ニ於テ認定公告相成リタル文部省ノ起業ニ係ル  
工科大学用地トシテ収用スヘキ土地ノ細目左ノ如シ

明治四十年十二月十六日

福岡県知事 寺原長輝

収容土地細目

粕屋郡箱崎町大字箱崎字北海門戸三三三〇、三三三一、三三三二、  
三三三三、三三三四、三三三五、三三三六、三三三九ノ一、三三三  
九ノ二、字踊堂三四六二、字浜小路三四九一、三四九三ノ一、三四  
九三ノ二、三五〇二、字中新立三五三四、字地藏ノ前三三七一五、郡  
村宅地字北海門戸三三三七、三三三八、字景福寺三四〇九、三四一  
一、三四一五、三四二六、三四二七、三四二九、三四三〇、三四三一  
併、三四三七、三四三八、三四三九、三四四二、字踊堂三四四五、  
三四四九、三四五〇、三四五一、三四五四、三四五九、三四六〇、  
三四六一、三四六七、三四六八、字浜小路三四七一、三四七二、三  
四七三、三四七四、三四七五、三四七六、三四七七、三四七八、三  
四八〇、三四八二、三四八五、三四八六、三四八七、三四八八、三  
四九〇、三四九二、三四九四ノ一、三四九四ノ二、三四九五、三四  
九六、三四九七、三四九八、三四九九、三五〇三、三五〇四、三五  
〇五、三五〇六、字北島三五八〇、三五八一、三五八四、三五八五、  
三五八六、三五八七、三五八八、三五八九、三五九〇、三五九一、  
三五九二、三五九四、三五九五、三五九八、三六〇二、三六〇三、  
三六〇四、三六〇六、三六〇八、三六一〇、三六一二ノ一、三六一

二ノ二、三六一三、三六一四、三六一六、三六一七、三六一八、三  
 六二〇、三六二二、三六二三、三六二六、三六二八、三六二九、三  
 六三〇、三六三二、三六三三、三六三四ノ一、三六三四ノ二ノ一、  
 三六三四ノ二ノ三、三六三五、三六三六、三六三九、三六四〇、三  
 六四二、三六四四、三六四五、三六四六、三六四七、三六四八、三  
 六五〇、三六五一、三六五二、三六五三、三六五五、三六五六、三  
 六五八、三六六〇、三六六一、三六六二、三六六三、三六六四、三  
 六六五、三六六六、三六六七、三六六八、三六六九、三六七〇、三  
 六七一、三六七二、三六七四、三六七五、三六七六、三六七七、三  
 六七八、三六七九、三六八三、三六八六、三六八七、三六八八、三  
 六八九、三六九〇、三六九一ノ一、三六九一ノ二、三六九二、三六  
 九三、三六九四、三六九五ノ一、三六九五ノ二 合併、三六九七、三  
 六九九、字地藏ノ前三七〇〇、三七〇一、三七〇二、三七〇四、三  
 七〇五、三七〇六、三七〇七、三七〇八、三七〇九、三七一〇、三  
 七一一、三七一二、三七一三、三七一六、三七一七、三七一九、三  
 七二〇、三七二二、三七二三、三七二五、三七二六、三七二九、三  
 七三一、三七三二、三七三三 合併、三七三五、三七三七、三七三八、  
三七三四 三七三九、三七四〇、三七四一、三七四三、三七四七、三七四八、  
 三七五〇、三七五一、字細道三七五三、三七五四、三七五五、三七  
 五六、三七五七、三七五八、三七五九、三七六一、三七六二、三七  
 六四、三七六六、三七六八、三七七〇、三七七一、字北畠三六九八、

畑字浜小路三五〇〇、三五〇一、字中新立三五三六、三五三七、三  
 五三八、三五三九、字地藏松原三五五九、三五六〇、三五六一、三  
 五六二、字地藏ノ前三七一八、字浜新建三五五三ノ一ノ三、山林字  
 中新立三五三一、三五三二、三五三三、三五三五、字浜新建三五  
 三ノ一ノ四保安林字地藏松原三五七七ノ一ノ一墓地

一〇六 粕屋郡箱崎町長阿部包保感謝状

(山崎文書)

箱崎町会議員

山崎親次郎君

曩ニ工科大学ヲ本町地内ニ創設セラルルヤ町会ヨリ挙ケラレテ委員  
 トナリ、全町ノ責任ヲ双肩ニ荷ヒ、其位置指定並ニ敷地ノ収用ニ至  
 リテハ殊ニ事体紛糾頗ル困難ヲ極メタルニモ不拘、上下ノ間ニ処シ  
 テ尽瘁至ラサルナク、寢食ヲ忘ルル事二年有八ヶ月、百難ヲ排シテ  
 遂ニ初志ヲ徹底シ平和ノ終局ヲ告グルニ至リタル功績實ニ偉大ナリ  
 トス、仍テ本町ハ聊カ其勞ニ酬シカ為メ別紙目錄ノ金品ヲ贈リ以テ  
 感謝ノ誠意ヲ表ス

明治四十二年十二月十五日

粕屋郡箱崎町長阿部包保 印

(註) 原本句読点なし。

## 第二節 工科大学官制の公布

### 一〇七 九州帝国大学工科大学官制

〔官報〕第八二五二号 一九一〇（明治四三年二月三日）

朕九州帝国大学工科大学官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十三年十二月二十一日

内閣総理大臣 侯爵桂 太郎

文部大臣 小松原英太郎

勅令第四百四十九号

九州帝国大学官制

第一条 九州帝国大学工科大学ニ職員ヲ置ク左ノ如シ

学長

教授

書記

第二条 学長ハ教授ヨリ文部大臣之ヲ補ス

学長ハ文部大臣ノ監督ヲ承ケ工科大学ノ事ヲ掌リ所属職員ヲ統督

ス

第三条 教授ハ専任六人奏任又ハ勅任トス講座ヲ担任シ学生ヲ教授

シ其ノ研究ヲ指導ス

教授ニシテ学長ニ補セラレタル者ハ講座ヲ担任セサルコトアルヘシ

第四条 書記ハ専任二人判任トス上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

附則

本令ハ明治四十四年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

### 一〇八 九州帝国大学工科大学開設

〔官報〕第八二五三号 一九一〇（明治四三年二月三日）

文部省令第三十六号

九州帝国大学工科大学ハ明治四十四年一月一日ヨリ開設ス

明治四十三年十二月二十三日 文部大臣 小松原英太郎

### 一〇九 九州帝国大学工科大学ノ事務文部省内ニ於テ取扱フ

〔官報〕第八二五三号 一九一〇（明治四三年二月三日）

文部省告示第二百四十二号

九州帝国大学工科大学ノ事務ハ当分ノ内文部省内ニ於テ之ヲ取扱フ

明治四十三年十二月二十三日 文部大臣 小松原英太郎

### 一一〇 九州帝国大学工科大学ニ設置ノ学科名並ニ授業開始期日

〔官報〕第八三一九号 一九一一年（明治四四年三月一八日）

文部省令第十一号

九州帝国大学工科大学ニ土木工学科、機械工学科、電気工学科、応用化学科、採鉱学科及冶金学科ヲ置キ本年九月十一日ヨリ授業ヲ開始ス

明治四十四年三月十八日 文部大臣 小松原英太郎

一一一 九州帝国大学工科大学ノ事務取扱場所

『官報』第八三二五号 一九一一(明治四四)年三月二七日  
文部省告示第九十七号

九州帝国大学工科大学ノ事務ハ文部省内ニ於テ取扱ヒ来リタル処四月一日ヨリ福岡県粕屋郡箱崎町同校内ニ於テ之ヲ取扱フ

明治四十四年三月二十七日 文部大臣 小松原英太郎

一一二 九州帝国大学工科大学ノ講座ニ関スル件

『官報』第八三二九号 一九一一(明治四四)年三月二日

朕九州帝国大学工科大学ノ講座ニ関スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セ

シム

御名 御璽

明治四十四年三月三十日

内閣総理大臣 侯爵桂 太郎

文部大臣 小松原英太郎

勅令第四十八号

九州帝国大学工科大学ニ左ノ講座ヲ置ク

土木工学 三講座

機械工学 四講座

電気工学 三講座

応用化学 四講座

採鉱学 二講座

冶金学 二講座

数学及力学 一講座

附則

本令ハ明治四十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

一一三 工科大学長委任事項

(一九一一(明治四四)年四月一五日達)

工科大学

工科大学長へ委任事項左ノ通相定ム但シ第三項ハ決行後即時開申ス

へシ

第一 判任官以下職員ノ事務分課ヲ命スルコト

第二 判任官以下ノ諸届ニ関スルコト

第三 俸給月額式拾円未満ノ雇員ノ進退ニ関スルコト

第四 巡視小使給仕職工等ノ進退ニ関スルコト

第五 宿直ニ関スルコト



第一章 九州帝国大学創立への動き

熱 機 関	船 用 機 関	熱 力 学	機 械 力 学	機 械 工 学 科 演 習 製 図 及 実 習	機 械 工 作 法	機 械 設 計 法	水 力 学	熱 機 関	機 構 学	応 用 力 学 (甲)	化 学 実 験	物 理 学 実 験	数 学 及 力 学 (甲)	第 一 年	機 械 工 学 科	卒 業 設 計 及 論 文	実 習 及 製 図	
○	二	一	一	二六	一	製図時間内ニ於テ適宜之ヲ課ス	○	二	一	三	○	三	三	第 一 期 毎 週		二五		
一	二	一	一	二二	一		一	三	一	三	三	三	三	第 二 期 毎 週		三〇		
二	二	一	一	二三	一		二	三	一	三	三	○	三	第 三 期 毎 週				
熱 機 関	応 用 力 学 (甲)	数 学 及 力 学 (甲)	第 一 年	電 氣 工 学 科	卒 業 設 計 及 論 文	実 地 見 学 及 練 習	工 業 經 済	紡 織	特 別 講 義	第 三 年	設 計 製 図 及 実 習	学 科 演 習	建 築 構 造	機 械 工 作 法	製 造 冶 金 学	電 氣 工 学 実 験	水 力 機 車	機 関 車
二	三	三	第 一 期 毎 週			○	○	○	○	第 一 期 毎 週	二五	二	一	三	○	二	一	一
三	二	三	第 二 期 毎 週			三	二	二	二	第 二 期 毎 週	二二	二	○	三	三	三	一	一
三	二	三	第 三 期 毎 週			○	○	○	○	第 三 期 毎 週	二二	○	○	三	三	三	一	一

第二編 九州帝国大学の創立

電 氣 鉄 道	電 力	電 灯	電 信 及 電 話	発 電 機 電 動 機 及 変 成 機	交 流 理 論	水 力 機	熱 力 学	電 氣 及 磁 氣 学 実 験	機 械 工 作 実 習	化 学 実 験	物 理 学 実 験	機 械 製 図	発 電 機 電 動 機 及 変 成 機	交 流 理 論	電 氣 及 磁 氣 測 定 法	電 氣 及 磁 氣 学	機 械 工 作 法	機 構 学	水 力 学
○	三	一	二	三	一	一	一	七	○	六	三	七	○	○	一	五	一	一	○
一	三	○	二	三	○	一	一	八	○	六	○	七	○	一	二	四	一	一	一
二	三	○	二	三	○	一	一	一	○	三	○	七	三	一	三	○	一	一	二
卒 業 論 文	実 地 練 習	電 氣 工 学 実 験	設 計 及 製 図	特 別 講 義	工 業 經 済	製 造 冶 金 学	電 氣 機 械 試 験 法	電 信 及 電 話	發 電 機 電 動 機 及 變 成 機	電 氣 工 学 実 験	機 械 工 学 実 験	設 計 及 製 図	土 木 工 学 大 意	建 築 構 造	応 用 電 氣 化 学	電 氣 機 械 設 計 法	電 氣 機 械 試 験 法	電 池	
○	○	一 二	一	一	三	三	一	三	二	四 時	九	○	一 三	一	二	二	○	○	○
○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	九	三	九	一	二	二	一	一	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	九	○	一 一	一	○	二	一	一	二

第一章 九州帝国大学創立への動き

		応用化学科							
		第一年							
		第一期毎週	第二期毎週	第三期毎週					
数学及力学(乙)	二時	二時	二時	二時	工場機械及設計	一	二	〇	二
応用力学(乙)	二時	二時	二時	二時	冶金学大意	二	〇	二	
物理学	二時	二時	二時	二時	電気工学実験	〇	二		
物理学実験	〇	三	二	〇	電氣工学大意	二			
鈹物化学	三	〇	〇	〇	化学工学大意	〇	二		
鈹物化学実験	〇	二	二	二	化学工学実験	〇	二		
無機化学	二	三	四	四	化学工学特別講義	〇	〇	三	〇時
有機化学	二	三	四	四	化学工学及応用電気化学実験	〇	〇	三	
分析化学	一	一	一	一	製造冶金学	二	〇	〇	
化学工学	〇	〇	三	三	工業経済	三	三	〇	
機械工学大意	三	三	三	三	工業経済	三	三	〇	
建築構造	二	二	〇	〇	△試金術	〇	〇	〇	
化学分析	二〇	一六	一五	〇	△試金術実習	〇	〇	〇	
第二年	第一期毎週	第二期毎週	第三期毎週		△地質学	〇	〇	〇	
物理化学	二時	二時	二時		△応用細菌学	〇	〇	〇	
化学工学	八	八	八		設計及製図	六	〇	〇	
応用電気化学	二	二	二		実地演習	六	〇	〇	
化学工学及応用電気化学実験	〇	〇	一九		研究及卒業論文	一	一	一	





第二編 九州帝国大学の創立

硫酸及人造肥料△	二	〇	〇	製造冶金学	〇	三
鉄冶金学	三	三	三	金属組織学〇	〇	二
冶金機械学	二	二	一	金属組織学実習〇	〇	三
試金術	二	二	〇	応急療法×	〇	〇
試金術実習	〇	三	三	鉱業法規	〇	二
化学分析	一二	一〇	一二	工業経済×	〇	三
瓦斯分析	三	〇	〇	特別講義		
選鉱学第一部	三	二	一	実地見学	七週間	
選鉱学第二部〇	〇	〇	二	卒業論文		
選鉱学実験	三	三	〇	備考		
材料運搬法	〇	二	二	表中×印ヲ附シタルモノハ聴講課目トス		
電気工学大意	二	二	二	〇印ヲ附シタルモノヲ必修課目トシテ選ブモノハ△印ヲ附		
電気工学実験	〇	〇	三	シタルモノヲ随意課目トスルコトヲ得		
土木工学大意	一	一	一	△印ヲ附シタルモノヲ必修課目トシテ選ブモノハ〇印ヲ附		
鋳床学×	二	二	二	シタルモノヲ随意課目トスルコトヲ得		
実地見学	八週間					
第三年	第一期毎週	第二期毎週	第三期毎週	一一五 九州帝国大学工科大学学期授業及在学規程	(二九一一(明治四四)年一〇月三日制定)	
電気冶金学	〇時	三時	二時	学期授業及在学規程		
電気冶金学実験	〇	三	三	第一条 学年ヲ分チテ左ノ三学期トス		
鉄冶金学実験	〇	三	三	第一学期 七月十一日ニ始マリ十二月二十五日ニ終ル		
鉄試金術実習	〇	三	三	第二学期 十二月二十六日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル		

第三学期 四月一日ニ始マリ七月十日ニ終ル

第二条 授業時間割ハ每学期ノ始メ学科課程ニ依リ之ヲ定ム

第三条 学生病氣其ノ他ノ事故ニ依リ休業日ヲ除キ三日間以上大学所在地ヲ離レントスルトキハ其ノ旨当該教室ヲ經テ学長ニ届出ツヘシ

第四条 在学ハ通シテ六箇年以上ニ亘ルコトヲ許サス但シ病氣又ハ兵役ノ為メ許可シタル休学年數ハ之ヲ算入セス

### 一六 九州帝国大学工科大学入学規程

(一九一一年一月一七日制定)

#### 入学規程

第一条 九州帝国大学通則第五条ニ依リ入学志望ノ者ハ入学願書ニ

第一志望第二志望ノ学科ヲ記入シ必ス高等学校ヲ經テ差出スヘシ

第二条 前条ノ入学志望者ニシテ六月十五日迄ニ入学願書ヲ差出シタル者ノ數各学科収容予定人員以内ナルトキハ其ノ志望学科第一年級ニ編入ス

入学志望者ノ數収容予定人員ニ超過シタルトキハ其ノ人員超過ノ学科志望者ニ限り高等学校在学中ノ学業成績品行并ニ健康状態等ニ依リ審査ノ上入学者ヲ定ム但シ審査ノ結果第一志望学科ニ入学許可セラレサル者ハ第二志望ノ学科ニ次員アルトキハ其科ニ入学ヲ許可ス

第三条 本分科大学々生ノ退学セシモノニシテ曾テ学修セシ学科ヲ

再修セント欲シ更ニ入学ヲ請フトキハ欠員アルトキニ限り九州帝国大学通則第六条ノ入学志望者ニ先チ入学ヲ許可スルコトアルヘシ

第四条 帝国大学分科大学卒業生ニシテ入学ヲ請フトキハ欠員アルトキニ限り試験ヲ須キス九州帝国大学通則第六条ノ入学志望者ニ先チ入学ヲ許可スルコトアルヘシ

第五条 九州帝国大学通則第五条若ハ第六条ニ依ル者ニシテ第二年級以上ノ欠員アル学科ニ入学ヲ請フトキハ其ノ入ラント欲スル級ノ学生ノ履修セシ諸学科ノ試験ヲ受ケシメ入学許可ヲ定ム但シ本分科大学学生ノ退学シタル者ニシテ本条ニ依リ原級以下ニ入学ヲ請フトキハ試験ヲ須キス入学ヲ許可スルコトアルヘシ

### 一七 九州帝国大学工科大学試験規程

(一九一一年一月三日制定)

#### 試験規程

第一条 学生ノ学業成績ハ本規程ニ依リ審査スルモノトス

第二条 学業成績ハ教官ノ見込ニ依リ各科目ニ就キ隨時筆記試験口述試験ヲ施シ又ハ其ノ他適宜ノ方法ニ依リ之ヲ審査ス

第三条 前条ノ方法ニテ不便ト認ムル科目ニ就テハ左ノ期間ニ於テ日ヲ定メ試験ヲ施行ス

第一学期 十二月十六日より全二十五日迄

第二学期 六月二十一日より全三十日迄

但シ本文ノ科目ニシテ第二学期ニ完了シタルモノニ就テハ三月二十五日ヨリ全三十一日迄ノ期間ニ於テ試験ヲ施行ス

第四条 学業成績ハ一月七月兩度ニ於テ各学科主任教授之ヲ取纏メ学長ニ申報スヘシ

第五条 各科目ノ成績評点ハ老百ヲ以テ最高トス

第六条 各科目ノ学年評点ハ第四条ノ成績評点ヲ平均シタルモノトス

第七条 各科目ノ学年評点悉ク五十以上ニシテ其ノ総平均点六十以上ノ者ヲ以テ及第トス

第八条 前条ニ依リ及第セサル者ハ次学年第一学期ヨリ原級ノ前科目ヲ再修セシム但シ教官ニ於テ再修ノ必要ナシト認メタル科目ハ之ヲ省略スルコトヲ得

第九条 病氣又ハ止ヲ得サル事故ニ依リ試験ニ欠席シタル者ハ其ノ理由ヲ詳具シ試験当日ヨリ一週間以内ニ当該教室ヲ経テ学長ニ届出ヘシ

第十条 前条ノ理由正当ナリト認メタル者ニ限り見込ヲ以テ成績評点ヲ査定シ又ハ追試験ヲ行フ

第十一条 定時試験ニ対スル追試験ヲ行フトキハ次学期授業開始後二週間以内ニ於テ之ヲ行フ

第十二条 追試験ヲ施行スル場合ハ其ノ科目ニ対スル得点ニ係數奇零ハヲ乘シ之ヲ評点数トス

第十三条 学生ノ席次ハ学年成績ノ平均点数ニ依リ之ヲ定メ卒業学生ノ席次ハ三学年ノ学年成績評点数ノ和ニ卒業論文ノ点数ヲ加ヘ四除シテ之ヲ定ム但シ休学若クハ落第シタル学生ノ席次ハ前学年ノ点数ニ依ル

第十四条 毎学年ノ終ニ於テ学年成績ノ総平均点ヲ揭示ス

### 一一八 九州帝国大学工科大学選科規程

(一九一一年(明治四四年)八月二日制定)

#### 選科規程

第一条 選科ニ入學ヲ許可スヘキ者ハ年齢滿二十年以上ニシテ其ノ学力ヲ考查シ所選ノ科目ヲ学修スルニ堪フルト認メラレタル者ニ限ル

第二条 前条ノ学力考查ハ試験又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ主管ノ教授之ヲ行フ

第三条 同一ノ学科ニ多數ノ志望者アル場合ハ学力考查ノ上其ノ優良ナル者ヨリ順次入學ヲ許可ス

第四条 所選ノ科目ハ成業ニ至ル迄之ヲ転換スルコトヲ許サス

一一九 九州帝国大学工科大学実習規程

(一九一二年(明治四五)年六月一〇日制定)

工科大学実習規程

第一条 実習ハ学生ヲシテ実地ノ業ヲ執リ或ハ実地工業上ノ視察ヲ為サシメ以テ学理応用ノ知識ヲ養成スルヲ目的トス

第二条 実習中學生ノ指導監督ハ教員之ニ任ス但教員同行セザルトキハ予メ実習ノ事項ヲ指定シ他ニ指導監督ヲ依嘱スルコトアルヘシ

第三条 學生ハ指定ノ期日以内ニ実習ノ事項ニ就キ報告書ヲ当該教室主任教授ニ提出スヘシ但教員同行スルトキハ之ヲ提出セシメサルコトアルヘシ

第四条 実習ノ事項ニ就キ特ニ試問ヲ施スコトアルヘシ

第五条 學生疾病又ハ止ムヲ得サル事故アリテ所定ノ期間実習ニ従事スル能ハサルトキハ之ヲ補充セシムル為メ卒業期日ヲ延期スルコトアルヘシ

一二〇 九州帝国大学工科大学学生実習心得

(一九一二年(明治四五)年六月一〇日制定)

工科大学学生実習心得

第一条 學生ハ指導教員又ハ特ニ設ケラレタル監督者ノ指揮監督ヲ受ケ品行ヲ慎ミ大学生タルノ体面ヲ重ンスヘシ

第二条 學生ハ当該作業場ノ諸規則命令等ヲ遵守スルハ勿論勤勉事ニ從ヒシテ作業場ノ累ヒトナルヘキ行為アルヘカラス

第三条 実習旅行ノ際教員同行セザルトキハ出発到着及宿所ヲ其都度直ニ当該教室ヲ經テ工科大学長ニ届出ツヘシ宿所変更ノ際モ亦同シ

第四条 疾病天災其他ノ事故ニ因リテ止ムヲ得ズ指定以外ノ地ニ滞在スルトキハ其理由ヲ具シ当該教室ヲ經テ工科大学長ニ届出ツヘシ

第五条 學生疾病又ハ止ムヲ得サル事故アリテ実習ニ従事スル能ハサルトキハ必ス出場時間前ニ其旨ヲ指導教員又ハ監督者ニ申出ツヘシ但全期ノ三分ノ一以上引続キ実習ニ従事スル能ハサルトキハ其事由ヲ具シ指導教員又ハ監督者ノ承認ヲ得当該教室ヲ經テ工科大学長ニ届出ツヘシ

第六条 実習中特別ノ着服ヲ要スル場合ニハ監督者ノ認可ヲ經テ制服制帽ヲ着用セサルコトヲ得

第七条 実習中報酬手当ノ類ヲ贈与セントスル者アルトキハ其事由ヲ工科大学長ニ具申シ認可ヲ經タル後ニ非レハ之ヲ受領スルヲ得ス

第八条 実習ニ關シテハ自己ノ意見ヲ以テ指定ノ事項ヲ変更スルヲ得ス若シ止ムヲ得ス之ヲ変更セントスルトキハ其旨ヲ當該教室主任教授ニ申出テ其指揮ヲ乞フヘシ

第九条 実習用トシテ本学備付ノ器具器械ヲ本学外ニ携帯スルノ必要アルトキハ当該教室主任教授ニ申出テ許可ヲ受クヘシ  
 第十条 前条ノ携帯品中破損紛失等アルトキハ其情状ニ由リ補修又ハ弁償セシムルコトアルヘシ

一一一 九州帝国大学工科大学要覽

(表紙)

大正三年七月

九州帝国大学工科大学要覽

九州帝国大学工科大学要覽

大正三年七月

目次

沿革略	一
敷地及建物	四
職員	七
学課及設備ノ概況	一四
土木工学教室	一八
機械工学教室	二二
電気工学教室	二七

応用化学教室	三二
採鉱学教室	三六
冶金学教室	四二
結論	四七
学生及生徒ニ関スル諸表	四八

目次終

挿図目次

一 工科大学正面	
二 本館入口	
三 額	
四 第一分館及第二第三分館	
五 第四分館及第三分館	
六 構内旧地藏森	
七 土木工学科列品室	
八 土木工学科図書室	
九 土木工学科製図室	
十 機械工学科材料試験室	
十一 機械工学科原動機室	
十二 機械工学科水力実験室	
十三 機械工学科機械工場	

- 十四 電気工学科電気及磁気実験室
- 十五 電気工学科標準計器室
- 十六 電気工学科測光実験室
- 十七 電気工学科電気機械実験室
- 十八 電気工学科高压電気実験室
- 十九 応用化学科定量分析室
- 二十 応用化学科瓦斯分析室
- 二十一 応用化学科醸酵実験室
- 二十二 応用化学科実験室 其ノ一
- 二十三 応用化学科実験室 其ノ二
- 二十四 応用化学科図書室
- 二十五 採鉱学科列品室
- 二十六 採鉱学科岩石実験室
- 二十七 冶金学科乾式試金室
- 二十八 冶金学科湿式試金室
- 二十九 冶金学科金属組織学実験室
- 三十 冶金学科研究室
- 三十一 第四分館講義室
- 三十二 第四分館物理実験室
- 三十三 九州帝国大学工科大学平面図

〔挿図省略〕

九州帝国大学工科大学要覽

○沿革略

九州帝国大学工科大学ハ明治四十三年十二月二十二日勅令第四百四十八号ヲ以テ福岡ニ置カレ同月二十三日文部省令第三十六号ヲ以テ明治四十四年一月一日ヨリ開設セラル是ヨリ先キ明治三十七八年戰役後國運ノ勃興ハ延イテ教育ノ進歩ヲ促シ既設ノ東西両大学ノ外新ニ東北及九州ニ帝国大学ヲ設置セントスルノ議漸ク朝野ノ間ニ行ハル、ニ至レリ恰モ好シ古河虎之助金百有餘万円ヲ獻シテ東北ニ理科大学九州ニ工科大学ヲ創設スルノ資ニ供セントノコトヲ請ヒ同時ニ福岡県ニ在リテハ既設ノ医科大学ニ加フルニ工科大学ヲ以テシ新ニ九州帝国大学ヲ設立セントスル希望切ニシテ此力創立費ノ内へ金貳拾五万円ヲ四ヶ年間ニ分納シ外ニ敷地五万二千餘坪（此ノ價格九万壹千七百五拾六円）ヲ福岡県粕屋郡箱崎町ニ選定シ總テ之ヲ寄附セシコトヲ申出テタリ是ニ於テ政府ハ此ノ寄附ト前記古河家ノ提供セル金額ノ内金六拾万八千五拾円トヲ以テ工科大学創設ノ意ヲ決シ四十年年度予算ニ其創立費ヲ計上シ議會ノ協賛ヲ經テ可決確定スルニ至レリ次テ四十一年五月文部省ハ工学博士眞野文二同渡邊渡同中野初子同廣井勇同河喜多能達同中原淳藏ヲ挙ケテ工科大学創立準備委員トシ翌年四月更ニ工学博士山川義太郎同服部鹿次郎同末廣忠介ヲ同

シク委員ニ命シテ創立ニ関スル一切ノ件ヲ議セシメ一方建築ハ四十二年六月ヨリ役ヲ起シテ創立ノ業著々進捗スルニ至レリ斯クテ四十二年十二月二十二日勅令第四百四十八号発布同時ニ九州帝国大学工科大学官制ノ公布トナリテ共ニ四十四年一月ヨリ施行セラル此ノ月一日文部省専門学務局長福原鎌次郎工科大学長事務取扱ヲ命セラレ工科大学ノ事務ヲ文部省内ニ開始ス同年三月文部省令第十一号ヲ以テ工科大学ニ土木工学科機械工学科電気工学科応用化学科採鉱学科及冶金学科ノ六科ヲ置キ同年九月十一日ヨリ授業開始ノ旨公布セラレ又同月勅令第四十八号ヲ以テ講座ノ種類及其ノ数ヲ定メラル尚同月三十一日勅令第四十三号ヲ以テ九州帝国大学官制公布前キノ工科大学官制廃止セラレ共ニ四月ヨリ施行セラル四月一日理学博士山川健次郎九州帝国大学総長ニ任セラレ教授工学博士中原淳藏工科大学長ニ補セラル同日工科大学事務所ヲ箱崎町ニ移転ス此時建築物ハ漸ク工科大学事務室及同附属倉庫物置学生控所等竣工シ次テ第一分館モ亦將ニ成ラントシツ、アリタリ七月十八日九州帝国大学通則ヲ定メラル此ノ月二十五日僅ニ竣工セシ第一分館火災ニ罹リテ焼失ス同月三十一日此ノ年ニ限り施行スヘキ入学規則ヲ制定ス八月五日学科課程及選科規程ヲ制定シ九月十一日授業ヲ開始ス入学者ノ総数八十三名アリ十月五日学期授業及在学規程並試験規程ヲ制定ス十一月十七日入学規定ヲ制定シ前キノ入学規則ヲ廢止ス四十五年三月末曩ニ焼失セシ第一分館ノ復旧工事竣工ス五月二十九日勅令第二百二十八号

ヲ以テ本学講座ノ種類及其数ヲ増設セラル六月十日実習規程及学生実習心得ヲ制定ス大正元年九月入学者七十七名ヲ收容ス五月九日総長理学博士山川健次郎東京帝国大学総長ニ任セラレ文部省実業学務局長兼東京帝国大学工科大学教授工学博士眞野文ニ総長ニ任セラル六月十六日勅令第二百四十九号ヲ以テ本学講座ノ種類及其数ヲ増設セラル九月入学者八十五名ヲ收容ス三年一月本館全部落成ス七月第一回卒業生ヲ出スノ運ヒトナリタリ

○敷地及建物

本学ノ敷地ハ福岡県粕屋郡箱崎町端白砂青松ノ間ニ在リテ元地藏松原ト称ス東南ハ広濶ナル平野ヲ隔テ、翠巒緑峯遠ク相連リ西北ハ博多湾ヲ隔テ、長汀曲浦西戸崎志賀島指顧ノ間ニ在リ其面積実ニ六万坪内五万二千九百七十七坪ハ即チ福岡県ノ寄附ニ係リ爾余七千八百三坪ハ国有林ヲ組替ヘタルモノナリ

建物ハ総坪数三千七百三十坪五合アリ明治四十三年六月工ヲ起シ大正三年三月工竣リ建築費総額七拾万六千五百五拾円ヲ費セリ主トシテ之カ建築ニ関係シタルモノハ故文部省建築課長久留正道元文部技師矢島一雄現文部省建築課長柴垣鼎太郎九州帝国大学技師倉田謙ノ四名トス今建物ノ主要ナルモノヲ掲クレハ左ノ如シ

一、本館  
煉瓦造ニ階建  
一、一二三坪

土木、機械、電気、応用化学、採鉱、冶金六学科教室

一、第一分館	木造二階建	二六二坪	一、試料室	木造平家建	二四坪
土木、機械、電気工学科分教室			一、倉庫其他		二九五坪七合余
一、第二分館	木造平家建	三八二坪五合			
応用化学科分教室			○職員（同職中ノ氏名ハ） （就職ノ順ニ依ル）		
一、第三分館	木造二階建	二七〇坪	学長	教授工学博士工学士	中原淳藏 熊本
採鉱、冶金学科分教室			土木工学教室		
一、第四分館	煉瓦造二階建 木造平家建	二二二坪	土木工学第一講座担任	教授工学博士工学士	服部鹿次郎 福岡
理科教室			土木工学第二講座担任	教授工学博士工学士	吉町太郎一 青森
一、事務室	木造平家建	二〇三坪五合	土木工学第三講座担任	教授工学博士工学士	君島八郎 福島
一、講堂	木造平家建	九四坪五合	土木工学第四講座担任	教授	西田 精 島根
一、学生控所	木造二階建	四〇坪	土木工学	助教授	三瀬幸三郎 愛媛
一、製版室	木造平家建	二〇坪	土木工学（外国留学中）	助教授工学博士工学士	林 桂一 新潟
一、機械工場	木造平家建	一六二坪	土木工学	講師	山田陽清 富山
一、水力実験室	煉瓦造平家建	四五坪	土木行政法	講師	吉田徳次郎 東京
一、機械工学実験室	煉瓦造平家建	三二四坪七合余	助手	助手	吉田 葆 愛知
一、電気機械実験室			助手	助手	眞隅勝次郎 福岡
一、蓄電池室	木造平家建	三〇坪	機械工学教室		
一、高圧電気実験室	木造平家建	六五坪	機械工学第一講座担任	教授工学博士工学士	中原淳藏 熊本
一、応用化学科炉室	煉瓦造平家建	二二坪五合	機械工学第二講座担任	教授工学博士理学士	岩岡保作 長野
一、乾式試金室	煉瓦造平家建	八四坪	機械工学第三講座担任	教授工学博士工学士	小野鑑正 福岡
一、炉室	煉瓦造平家建	六〇坪			



地質学	助教授	理学士	河村幹雄	東京	材料強弱学教室	教授	工学士	菱田唯藏	長野
採鉱学	講師	工学士	的場 中	三重	材料強弱学講座担任	教授	工学士	菱田唯藏	長野
	助手		鶴田虎吉	佐賀					
冶金学教室									
冶金学第二講座担当	教授	工学士	渡邊芳太郎	東京	建築構造	講師	工学士	倉田 謙	東京
冶金学第一講座担当	教授	工学士	末廣忠介	山口	工業経済	講師	法学士	山内正瞭	沖繩
冶金学	講師	工学士	佐藤廣太	山形	鉱業法規	講師	法学士	星野禮助	福岡
冶金学	講師		牧野 立	東京	応急療法	医科大学助教	医学士	奥島愛治郎	愛媛
冶金学	講師	工学士	田邊唯司	岡山	事務室				
	助手		松本陽逸郎	宮城	書記			關 四郎次	福岡
	助手		柴田正雄	兵庫	書記			中村一之	熊本
	助手				書記			池見治雄	福岡
								宇野親時	熊本
理学教室									
数学及力学講座担任	教授	理学士	桑木 或雄	東京	○学課及設備ノ概況				
物理学講座担任	教授	工学士	荒川文六	福岡	学科及講座	九州帝国大学工科大学二八次ノ六学科ヲ置ク			
物理学(外国留学中)	助教授	理学士	大場成實	新潟	土木工学科				
化学講座担任	教授	工学士	西川虎吉	福岡	機械工学科				
化学講座担任	教授	工学士	中澤良夫	東京	電気工学科				
化学(外国留学中)	助教授	工学士	丸澤常哉	新潟	応用化学科				
化学	助教授	工学士	柴田 忠	三重	採鉱学科				
	助手		島田慶一	三重	冶金学科				
	助手		寺島久雄	長野					

本学ニハ次ノ講座ヲ置ク

土木工学	四講座
機械工学	五講座
電気工学	四講座
応用化学	四講座
採鉱学	二講座
冶金学	三講座
数学及力学	一講座
物理学	一講座
化学	一講座
材料強弱学	一講座
応用地質学	一講座
建築学	一講座

授業ノ方針 本学諸学科ハ何レモ皆深キ基礎学ノ上ニ立チテ広く実地ニ活用センコトヲ期シ基礎学課トシテハ一般ニ数学力学及ヒ応用力学ヲ課スルノ外更ニ各科ノ必要ニ応シテ物理学又ハ化学ヲ授ケ或ハ其ノ実験ヲ課シテ深キ根柢ノ上ニ立チ以テ實際ノ応用ニ遺憾ナカラシムルニ努ム此等ノ学課ニ関シテハ特ニ講座ヲ設ケ學術最新ノ進歩ニ伴ヒ且ツ近時著シク発達セル所謂応用的数学応用的物理学等ノ方面ニ於テ工学ト密接ナル關係ヲ保タシム

各学科ハ更ニ其ノ専門諸科目ニ涉リテ縦説横講努メテ粹ヲ抜き要ヲ

摘ミ学ヲ者ヲシテ啓発スル所アラシム実習及実験ハ本学ノ特ニ力ヲ致セルモノニシテ講義時間ノ比較的少ナクシテ而カモ実習時間ノ反ツテ多キカ如キ皆学生ヲシテ修得ノ理論ニ依リテ充分ニ実地活用ノ力ヲ揮ハシメントスルニ外ナラス又各学科ハ其履修スヘキ方面ヲ異ニスルハ勿論ナレトモ實際仕事ヲ為スニ当リテハ他ノ諸学科ト唇齒輔車ノ關係ニ在ルモノ尠ナカラス殊ニ我国ノ如キ分業ノ尚ホ未タ完カラサル所ニ在リテハ他ノ専門智識ヲ欠クカ為メ我カ技能ヲ施スニ不便ナル場合少ナカラス故ニ總括的ナル他学科ノ概念ヲ授クルニ努メツ、アルカ如キモ亦多少本学特色ノ一ナラスンハアラス

一般ノ設備 各学科共ニ設備ハ尚ホ未タ完成ノ域ニ達セス唯学生ノ授業上必須ナルモノハ略ホ之ヲ備ヘ得タルニ止リ更ニ将来ノ施設ニ俟タサルヘカラサルモノ蓋シ尠ナカラス

各学科ニハ專屬ノ図書室ヲ設ケテ図書雜誌ヲ備ヘ以テ職員学生ノ閲覧ニ便ニシ列品室ヲ設ケテ標本模型原料ノ類ヲ蒐集セリ

学内ニハ各種ノ実験室ヲ設ケテ一ツハ職員ノ研究ニ供シ他ハ学生ヲシテ実地ノ練習ヲナサシム設計製図ノ為メニハ各級專屬ノ製図室ヲ備フ又学生実習ノ為メニハ隨時実地見学ヲ行ハシメ或ハ出張練習ニ依リテ實際ノ手腕ヲ養ハシム

学生ノ体育ノ為メニハ又特ニ力ヲ致シ剣道柔道弓術球技端艇ノ諸設備アリ夏期ニハ熟練ノ教師ヲ聘シテ水泳ヲ為サシム

此ノ外本学ニハ配電装置ヲ有シ中央発電機室ヨリ百ゾおるとノ直流

ヲ以テ各教室実験室等ニ送電ス又構内電話装置ヲ設ケテ共同電池式百人附交換機及百二十回線用試験配電盤ニ依リ学内ノ電話通信ヲ行フ又構内ニ正シキ時間ヲ知ラシメンカ為メ一個ノ正確ナル中央電気時計ヲ備ヘ電流ノ作用ニ依リテ主要ノ個所ニ設ケタル十六個ノ電気時計ヲ共働セシム

学内ノ各室ニハ殆ント全部ニ涉リテ蒸汽暖房器ノ設ケアリ冬期熱機関実験室ニ於ケル暖房装置ニ依リ蒸汽ヲ送入ス

構内ノ後庭ニハ二個ノ井アリ電力ヲ用フル渦巻ほんぶノ作用ニ依リ水ヲ高サ六十尺容量百八十石ノ水槽ニ汲上ケ以テ学内ノ給水及消火ノ用ニ供ス建物ノ内外ニハ多クノ消火栓ヲ設ク雨水汚水ノ排除ニハ主ナル道路ノ両側ニ側溝ヲ設ケ及ヒ大小ノ排水管ヲ地下ニ埋設ス又実験其他ノ目的ニ用フル瓦斯ハ其ノ供給ヲ市内ノ瓦斯会社ニ仰ク以下各教室ニ就テ其ノ概況ヲ説明スヘシ

○土木工学教室

学科課程 本学科ノ学科課程次ノ如シ

〔中略〕

設備ノ大要 本教室ノ設備トシテハ図書凡ソ三千七百冊雑誌四十一種アリ雑誌ハ初号以来全部完備セルモノ八種ヲ除ケハ皆比較的新刊ノモノニ属ス

測量実習ノ為メニ備フル主ナル器械ニハ転鏡儀十三台、水準儀十三

台其他羅盤、平板、六分儀、函尺、向桿並ニ製図用器械若干点アリせめんとノ実験ニハ之ニ要スル器械一式ヲ備フ

研究及参考用トシテハ列品室ニ建築用木材及石材標本若干点ヲ蔵ス其外鉄道ニ関シテハ聯動装置、たぶれつとましん、ぶろつくましんアリ橋梁ニ関シテハ各種ノ全部模型五点及局部模型三点アリ河海工学ニハ数種ノ堰、水制、灯台、数種ノ自記水位計、波力計等アリ衛生工学ニ関シテハ其ノ模型類未タ全ク備ハラス須ラク今後ノ施設ニ俟タサルヘカラス

此ノ外氣象学ニ関スル気圧、温度、湿度、雨量、風力ヲ自記スル器械若干点流水ノ速度ヲ測定スヘキ数種ノ流速計アリ又特種ノモノトシテハ写真測量儀、太陽転鏡儀、太陽羅盤、精進儀、迅測儀、各種ノ測面器いんてぐらふ、はーもにつくあならいざー、すたんれー社製基線測定機及橋梁ノ撓度ヲ自記セシムヘキ田邊式撓度記録器等アリ

学年 学期 実習事項

- |    |    |               |
|----|----|---------------|
| 第一 | 第一 | 地形測量          |
| 第二 | 第二 | 道路測量          |
| 第三 | 第三 | 石拱設計 三角及河川測量  |
| 第二 | 第一 | 木橋設計 せめんと試験実習 |

第二 鉄橋設計

第三 鉄橋及建築構造設計

第三 第一 開門等ノ設計

第二 上水若クハ下水道ノ設計

第三 卒業論文

此ノ外第二学年初ノ夏期休業中ニハ学生ヲシテ出テ、公私ノ委託ニ  
 応シ実地ノ測量ヲ為サシメ第三学年ノ夏期休業ハ亦之ヲ利用シテ更  
 ニ実習見学又ハ研究ヲ行ハシム、第三学年第三期ハ即チ従来習得  
 セル智識ヲ基礎トシ之レニ実地ノ材料ヲ用ヒテ設計ヲ試ミシムヘキ  
 モノニシテ計画説明書計算書及図面ヲ具シテ提出セシム

○機械工学教室

学科課程 本学科ノ学科課程ハ次ノ如シ

〔中略〕

設備ノ大要及実験実習ノ要目 図書室ニハ図書三千四百余冊雑誌三  
 十四種ヲ有シ内初号以來完備セルモノ六種アリ

本教室ハ実習及研究ノ為ニ材料試験室、熱機関実験室、水力実験室、  
 機械工場ヲ有ス今其ノ設備ノ一斑ヲ挙クレハ次ノ如シ

材料試験室ハ機素構造用各種材料ノ機械的性質ヲ試験スル所ニシテ  
 重量一噸ツ、ノ鑄鉄円板総テ十個ヨリ成ル加重装置ヲ有セル三十噸  
 材料試験機、七十五めーたーきろぐらむ衝撃試験機、三千きろぐら

む球圧硬度試験器、試験桿目盛器械等ヲ有セリ本試験室ニ於テ既ニ  
 行ヒタル主ナル試験ハ検定桿ノ試験、鑄鉄材料ノ彎曲試験及学生卒  
 業論文作製ノ為メニ行ヒシ圧縮検定桿ヲ用ヒテ球圧試験器ニ具ヘラ  
 レタルめっすどーぜノ試験及板ノ接合ニ用ヒラレタル鋳（加熱状態  
 ニテ工作）ニ起レル伸張ノ測定等ナリ

熱機関実験室ハ蒸汽機関、瓦斯機関其ノ他熱ニ関スル諸種ノ実験ヲ  
 ナス所ニシテ七十五きろわつと横式カーチス蒸汽タービン発電機及  
 表面凝結装置、十二馬力実験用小型蒸汽機械、四十馬力吸入瓦斯機  
 関、瓦斯発生機及二十きろわつと発電機、塩水抵抗機、三噸天井釣  
 行くれーん、圧力二百封度過熱機器附ばぶこつく及うゐるこつくす  
 水管式蒸汽缶、圧力百八十封度らんかしやー蒸汽缶、学内暖房用ノ  
 元機械及実験用機関いんぢけーたー、瓦斯機関爆發計、かりりめー  
 たー等ノ計器類ヲ備フ猶目下熱空汽機関、製氷機等ヲ設置セントセ  
 リ本実験室ニ於テ学生ノ実験セルモノハ蒸汽缶焚炭実地演習、小型  
 蒸汽機械及蒸汽タービンノ能率並ニ其蒸汽消費量、吸入瓦斯機関ノ  
 能率並ニ其燃料消費量、卒業論文作製ノ為メニ行ヒシいんぢえくた  
 ーノ吐出シ水量及其ノ能率並ニ暖房用放熱器ノ放熱量等ノ諸測定ナ  
 リトス

水力実験室ハ水力学及水力機械ニ関スル事項ヲ実験スル所ニシテ十  
 五馬力もーとる直結井口式渦巻ぼんぶ、十六馬力もーとる直結えし  
 やーういす二段渦巻ぼんぶ、いんばるすたーびん、ふらんしすたー

びん、水槌ぼんぶ、高圧及低圧たんく、井戸、溜池、開渠、暗渠等ヨリ成ル給水及流水ノ装置ハ其ノ主ナル設備ニシテ外ニ各種ノ測定器トシテ圧力計検定器、水量測定用器具、ほん速度記録計、ぶろーねーぶれーき、うゑんちゆりめーたー装置、五きろわつと発電機、うゑすとん精密電圧計及電流計、電流記録計、水面記録計及各種ノげーぢ若干ヲ備フ、本実験室ニ於テ学生ノ行ヒシ主ナル実験ハ圧力計及堰ノかりぶれーしよん、うゑんちゆりめーたーノかりぶれーしよん及摩擦損亡試験、二ツノ渦巻ぼんぶ、三ツノたーびんノ馬力及水槌ぼんぶノ効率試験並ニ卒業論文作製ノ為メニ行ヒシにーどるのつづるノ約流速度ノ配置及効率、五吋渦巻ぼんぶノ効率、ふらんしすたーびんノ理論的損亡ト実験的損亡トノ比較、水槌ぼんぶノ効率ノ変化等ナリ機械工場ハ学生ニ一般工作術ノ実習ヲ為サシムル外職員学生ノ考案ニ成ルモノヲ試製シ或ハ製作方法ヲ研究スル所ニシテ正確精密ナル機械ヲ作り得ヘキ諸般ノ設備ヲ有ス其主ナル装置ハ鍛工場ニ於ケルもーとる附七分一噸空釜、焼キナマシ用瓦斯炉、鑄工場ニ於ケル熱風こしき炉、もーとる附送風機、真鍮炉、起重機、木工場ニ於ケル縦切り横切りノ二鋸ヲ備ヘタル丸鋸機械、廻ハシ切り鋸機械、木工旋盤、仕上工場ニ於ケル水平中繰リ盤、ミリ盤、風見形錐盤、手送り錐盤、振り刃盤(しえーぱー)、万能刃物研ぎ及三台ノ旋盤等ニシテ此ノ外各種ノげーぢ、定規、まいくろめーたー、らいまー等ノ精密ナル小道具等ヲ備フ

次ニ製図用設備ノ主ナルモノハどらふちんぐましん一個、普通製図用器具ノ外本学ノ考案ニ成ル自在製図機四十余箇トス製図実習ニハ各学年共ニ多クノ時間ヲ是ニ用ヒ特ニ第三学年ノ第二学期以後ハ専ラ卒業計劃ノ製図ヲナサシム

又別ニ列品室アリテ機構学用標本及模型數十個、工作材料ノ標本、熱機関、水力機、製作工場等ニ関スル標本及模型若干点ヲ有ス

学外実習、卒業設計及論文 前記実習ノ外夏期冬期ノ休暇ヲ利用シ学生ヲシテ教官引率ノ下ニ又ハ単独ニ見学旅行ヲナサシメ或ハ官私諸工場ニ依頼シ工作其ノ他ノ実習ヲナサシメ其ノ報告ヲ徴ス

第三学年ニ至リ其ノ第二、三学期ニ於テ学生ヲシテ一ツノ題目ニ付自ラ実験又ハ研究ヲナシ其ノ結果ヲ卒業論文トシテ提出セシム別ニ又自ラ撰ミタル機械ニツキテ考案設計シタルモノヲ製図シ卒業設計図トシテ之ヲ提出セシム

#### ○電気工学教室

学科課程 本学科ノ学科課程次ノ如シ

(中略)

特別講義ハ電気工學上実地ニ関シテ特種ノ智識経験ヲ有スル人ヲ撰ミ臨時之ヲ囑托ス最近実行ニ係ル者左ノ如シ

無線電信電話

通信技師 鳥瀧工學士

製作工場内電気応用法

製鉄所技師 岸原工學士

設備ノ大要 図書室ニハ電気工学及電気及磁気学ニ係ル和洋書約千冊同雜誌三十一種アリ機械工学図書室ト相隣ラシメ兩教室ノ教員學生ハ相通シテ閲覧スルニ便ナラシム

実験室ハ総數十三個アリ電気及磁気学実験室三個、測光実験室三個、蓄電池実験室二個、交流波状計実験室（写真暗室付）電気機械実験室及高圧電気実験室各一個教授専用ノ研究実験室二個即チ是ナリ

標準器室ニハ精確ナル標準測定器ヲ備ヘ隨時ニ実験用計器ヲ檢定ス電気機械実験室ニ接シテ原動発電機室、蓄電池室アリ実験用ノ電力及学内各般ノ用ニ供スル電力ヲ供給ス

列品室ニハ教授用ノ標本ヲ置キ物品室ニハ実験用器具材料ヲ保管ス此等ノ諸室ニ備付ケタル機械器具標本類中其ノ最主要ナル者ヲ摘記スレハ次ノ如シ

電気及磁気学実験室ニハ一個又ハ數個ノ象限電位計、正切電流計、ばりすちつく電流計、だーそんばる電流計、差働電流計、磁力計、電位差計、せこーむ計、導磁率計、だんびんぐみーたー、めーとるぶりつち、だぶるぶりつち、こーるらうしぶりつち、いんだくしよんぶりつち、はいふれけんしーじえねれーたー、はいふれけんしーみーたー、抵抗、自己及相互誘導係數、靜電容量、起電力等ノ標準器アリ

測光実験室ニハうえーばー光度計、球形光度計、交照光度計、るんまーぶろだん光度計、携帯用光度計、分光光度計等アリ

電気機械実験室ニハ一個又ハ數個ノ直捲直流発電機及電動機、分捲直流発電機及電動機、複捲直流発電機、三相交流発電機、二相交流発電機、三相誘導電動機、回転変流機、変圧器、配電盤及接続盤、実験台、三噸用天井釣行くれーん井ニ実験用測定器等アリ

高圧電気実験室ニハ二十五万ウおると試験用変圧器、いんだくしよんれぎゅれーたー、高圧実験台及該実験ニ必要ナル開閉器、安全器、測定器等アリ

標準器室ニハけるういんあむべあ衡、しーめんすまぐねちつくばらんす、りーづ直流交流こんばれーたー、うえすとんらぼらとりーすたんだーどあむべあ計及うおると計、しーめんすばんつあーがるうあのみーたー其ノ他諸種ノ標準器アリ

標本室ニハ各種電灯、各種被覆電線、電信機、電話交換機、電話機、無線電信機、電気振動模型、電気鉄道線具等アリ

交流波状計実験室ニハおすしろぐらふ及写真現像装置ヲ備フ此ノ外修理室ニハれーす、しえーばー、どりる、鑪台等ヲ具ヘテ実験用器具機械ノ応急修理及製作ヲナスヲ得、原動発電機室ニハ五十きろわつと同期電動発電機ヲ備ヘ学外ヨリ購ヒ得タル電力ヲ変電シテ学内ノ用ニ供ス蓄電池室ニハ放電容量百六十二あむべあ時間ノ蓄電池六十個、放電容量六十六あむべあ時間ノ蓄電池四十三個ヲ備ヘ各種ノ実験、構内電話及電気時計用ノ電流ヲ供給ス

実習及卒業論文 學生ノ実地練習ハ前表中ニ規定セルモノ、外第三

学年夏期休業中、学外各方面ノ電気工学ニ関スル事業者ニ委嘱シ工場  
発電所等ニ於テ実地ニ之ヲ行ハシメ、其ノ都度學術的報告書ヲ提出セ  
シム、其ノ他各学年ニ於テ便宜ノ時期ヲ撰ミ、数日又ハ数週間教授引率  
ノ下ニ見學旅行ヲ為ス

卒業論文ハ、学生各別ニ電気工学上重要ナル問題ヲ撰ミテ之ニ関スル  
學說、沿革、実験、研究、意見等ヲ組織的ニ編輯シテ提出セシム

### ○応用化学教室

学科課程 本学科ノ学科課程次ノ如シ

(中略)

本教室ニアリテハ特ニ基礎学科ヲ必要トシ無機、有機及ビ分析化学  
以外ニ数学、力学及物理学等ヲ課シテ理論的学科ノ智識ヲ豊饒ナラ  
シメ、以テ応用化学研究ノ基礎ヲ鞏固ナラシム又講義ハ標本、図面等  
ヲ用ヒテ解説スルノミナラス、学生ヲシテ容易ク理解セシメンカ為メ  
ニ幻灯及実験ヲ用ヒ且ツ参考書ヲ閲読セシムルノ方針ヲ執レリ  
設備ノ大要 図書室ニハ応用化学研究上欠ク可カラサル図書雜誌類  
ヲ備フ現在ニ於ケル図書総数和洋併セテ千五百三十一部ニ及ヘリ未  
タ以テ充分ナリトハ謂フ可カラサルモ研究上ニハ左シタル支障ヲ見  
ス又雜誌類ハ斯學最新ノ研究成績ヲ知得スルニ特ニ必要ナルヲ以テ  
四十三種ノ外国雜誌ヲ備ヘ付ケ一定ノ時間内学生ヲシテ自由ニ是レ  
カ繙読ヲ許シツ、アリ今は等ノ諸雜誌ヲ国別ニ從ヒテ分類スレハ独

二十九、塊一、英九、米四ト成ル

実験ハ本教室ノ特ニ重キヲ置ク所ニシテ、実験室設備ノ完全ヲ期セリ  
実験室ハ普通ノ分析実験室以外ニ特ニ特別研究室ノ數ヲ増シ、教授学  
生相共ニ特種ナル化学工芸ノ研究ニ便ナラシメツ、アリ醱酵、炭水  
化物、色素、瓦斯及燃料、電気化学及光線化学等ノ諸研究、実験室ハ  
何レモ其ノ専門学ヲ研鑽スル為メ細菌室、偏光器室、元素分析室、  
蓄電気室、電気炉室、暗室、写場等ノ設備ヲ有セリ又一般実験室ニ  
ハ主トシテ定性定量分析実験ヲ行ハシメ工業化学実験室ハ、色素、  
業及ヒ脂油等ノ研究ヲ行フニ使用セリ又特ニ防火的構造ノ一棟ニハ  
諸種ノ炉ヲ設置シ、窯業其ノ他多少大仕掛ノ火氣ヲ要スル実験ヲ行ハ  
シム

各実験室ハ其ノ建築上特ニ衛生ニ注意シ室内ニハ多数ノ通気室ヲ設  
ケ硫化水素室ノ如キハ実験室附近ニ廊下ヲ以テ接続セル一棟ニ設ケ  
他室ト隔離セシメタリ

標本類ハ元素、無機、有機化合物中ノ主要ナルモノ及ヒ工業化学原  
料製品標本等授業上必要ナルモノヲ蒐集シ之ヲ列品室内硝子戸附戸  
棚ニ陳列セリ其ノ主ナルモノヲ挙げハ肥料標本、染色標本、石油  
生成物標本、アルカリ工業原料及製品標本、木材乾溜標本、製紙、  
製糖及ヒ窯業製品標本等ニシテ今後逐年其完備ヲ期シツ、アリ  
実習及卒業計劃 本教室ニテハ毎年休暇中ヲ利用シテ職員引率ノ下  
ニ学生ヲシテ化学工業ノ諸会社ニ見學セシメ或ハ単ニ学生ノミヲ派

シテ是等ノ会社ニ於テ実習ヲ行ハシメツ、アリ第三学年第二、第三学期ニ於テハ学生ヲシテ教授指導ノ下ニ從來修得セル智識ヲ基礎トシテ特種ノ題目ニ就キ各研究の実験ヲ開始セシメ其ノ計劃説明書、成績報告書等ヲ卒業論文トシテ提出セシム

○採鉱学教室

学科課程 本学科ノ学科課程次ノ如シ

(中略)

本教室ニ於テハ右表ノ如ク本学ノ一般授業方針ニ從ヒ数学、物理学及其実験等ノ基礎的科學ヲ課スル外更ニ電気工學実験、煉炭及団鉱、燃料及驗熱、驗熱実習、瓦斯分析、鉱業地理、応急療法及工業經濟等ノ課目ヲ課程中ニ編入シタリ

授業方法及内容ニ於テモ創意ヲ加ヘタル点少カラス鉱物學実験ニ於テハ主トシテ其材料ヲ有用鉱物ニ採リ其ノ用途、応用ノ範圍等ヲ同時ニ解説シテ鉱物ニ対スル趣味ヲ増サシメント企テツ、アルカ如キ其ノ一例ナリ又岩石學及其ノ実験ニアリテハ岩石ノ組成、構造及本性ニ関シ精確ナル觀念ヲ得セシムル外鉱石、脈石、母岩等ノ檢鏡ニ依リテ鉱床學ノ基礎的智識ヲ養ハシメ地質學ニ於テハ实地演習ト相俟ツテ地質調査ヲ行フニ充分ナル智識ト技能トヲ養ハシムルニ努力シツ、アリ採鉱學第一部ニ於テハ主トシテ採鉱學一般ニ關スル事項第二部ニ於テハ前者中特殊ノ題目タル排水、通氣、点灯、変災等ニ

關スル事項ニ就テ特ニ講述シ選鉱學第一部ニ於テハ選鉱學ノ概念ト金屬鉱石ノ選鉱方法トヲ會得セシメ第二部ニ於テハ選炭ニ關スル事項ヲ論スルコトナセリ又鉱業法規ニ於テハ鉱山法律以外鉱業經營ニ必要ナル一般法律及規定ヲモ併セ講シツ、アリ

設備ノ大要 本教室ニ於テハ鉱物學実験室ト岩石學実験室トヲ分チ之ニ隣接シテ夫々研究室ヲ置キ各其ノ必要トスル特殊ノ設備ヲ施ス等主トシテ一般授業、学生ノ実験、教授ノ研究等ノ便ヲ図リテ室ノ構造、配置ヲ定メタリ

圖書ハ学生ノ參考ニ適スル教科書ノ類ヲ始メ教授ノ研究ニ必要ナル圖書、論文、報告ノ類約千五百部雜誌二十三種ヲ備フ

器械ハ鉱物學岩石學ニ關スルモノニハふゆう寸製大反射測角器、ざいべると製及ふゆう寸製岩石顕微鏡等アリ、鉱山測量ニ關スルモノニハ特殊ノ目的ニ対スルふらいべるとひ経緯儀台、ふーるまん堅坑錘線懸垂装置、しゅみつど堅坑錘線懸垂装置、たーれんちべるひ磁針儀等ニ至ルマテ殆ト欠如セルモノナシ又採鉱學ニ關スルモノニ於テハ鑿岩機數種、採掘及支柱用具一式及各種ノ安全灯等ヲ備フ

標本中主ナルモノヲ挙クレハ鉱物ニ於テハ化學成分ニヨリテ分類セル内外産鉱物標本、日本産鉱物標本、應用鉱物標本等アリ岩石ニ於テハ成因、産状、化學成分、地質年代ニ從ヒテ分類セル内外産岩石標本、建築及裝飾用石材標本等アリ又自然分類ニ依ル内外産化石標本、石炭紀及第三紀石炭ニ關スル植物化石標本等アリ採床標本ハ本

邦及滿洲ニ於ケル諸鉱山ニ関スルモノ、外諸外国鉱山ニ関スルモノモ亦少ナカラズ採鉱ニ関スル標本ハ不備ノモノ多キモ選鉱標本ハ本邦採要鉱山ヨリ寄贈ヲ仰キタルモノ少ナカラサルヲ以テ授業上大ナル不便ヲ感セス

模型中主要ナルモノヲ挙クレハ鉱物結晶模型ヲ始メ断層、皺曲、不整合等一般地質鉱物ニ関スルモノ、外ウエテすういやす火山、独逸はるつ地方ノ地形及地質ヲ示ス模型アリ採鉱ニ関スルモノニハ三井家ノ寄贈ニ係ル三池炭鉱万田堅坑、鉄壁堅坑、がいすら一式扇風機、みゆんつな一安全捕捉器等ノ模型アリ又選鉱ニ関スル模型トシテハかゝる式粉碎機、かゝりつく式震動篩、すびつるつて一、すたいん式淘汰盤、びるはるつ式環状淘汰機等アリ

実習及卒業論文 第一学年ノ冬季休業ニハ職員引率ノ下ニ学生ヲシテ金屬鉱山及炭山ヲ見学シ以テ鉱山ノ概念ヲ得セシメ又其ノ春季休業ニハ地質旅行ヲナサシム第二学年ノ夏期休業ニハ鉱山測量及一般坑内実習ヲ別子銅山ニ行ヒタル後更ニ筑豊地方ニ於テ炭坑ニ関スル実習ヲナサシメ更ニ第三学年ニ於テハ長期ニ亙リ重要鉱山ノ見学ヲ指定シ報告及論文ノ材料ヲ蒐集シ併セテ是ニヨリテ起草セル報告及論文ヲ提出セシム

### ○冶金学教室

学科課程 本学科ノ学科課程次ノ如シ

### 〔中略〕

本学科亦本学一般ノ授業方針ニ從ヒテ基礎的科學ヲ課スルノ外本邦鉱業ノ現状ニ鑑ミ且ツ臨機採鉱作業ノ処理ニ支障ナカラシメンカ為メ從來一般ノ冶金学科課程ニ見サリシ數個ノ學課ヲ其ノ課程中ニ編入シタリ今課程ノ大要ヲ説明センニ第一学年ニ於テハ地質學及測量ヲ課シ以テ採鉱上ノ素養ヲ深カラシメ鉱業地理ニ依リテ内外鉱業ノ趨勢並ニ市価ノ變動等ヲ知ラシメ第二学年ニ於テハ冶金學ノ綱領ヲ修得セシムルヲ主眼トシ併セテ作業ニ必要ナル冶金機械學、材料運搬法、土木工學、電気工學並ニ其實験ヲ課シ尚採床學ヲ聴講セシメ鉱床ノ性状ヲ知ラシムルヲ期セリ第三学年ニ於テハ鉱山、製煉所及工場ノ見學ヲ命ジ鉱業ノ技術的並經濟的智識ヲ得セシメ又金屬組織學ヲ課シテ諸金屬並ニ合金ノ性状ヲ明カニセシメ鉱業法規、工業經濟及応急療法ニヨリテハ他日ニ於ケル鉱業上ノ職責ヲ完フセシメンコトヲ計レリ

設備ノ大要 本教室ニ於テハ授業上ニ要スル諸般ノ実験室ヲ備フル外冶金學、鉄冶金學、電気冶金學等ノ研究ニ対スル実験室ヲモ設ケ得タリ然リト雖モ既設ノ設備ハ尚ホ予期ノ域ヲ去ルコト甚々遠キ現況ニ在リ今左ニ其大要ヲ記サン

図書ハ採鉱學科ノモノト同室ニ備ヘ以テ参考上ノ便宜ヲ計リ且ツ之レカ重複ヲ避ク目下図書千三百余冊雜誌十六種ヲ蔵ス

実験ニ関スル機械器具ノ主ナルモノハ試料ノ準備ニ対シちつぷまん

く式嚙鋸機、ぶらうん式粉碎機、あむばいあー式試料採収機等アリ  
 冶金学実験用ニハけーすばつく式混汞器、しゆるちるゑー式並ニれー  
 ぶ式攪拌器等アリ鉄冶金学及電気冶金学実験用ニハもあさん式、ぼ  
 あへるす式、げーれんす式等ノ電気炉並ニ諸種ノ瓦斯炉等ヲ備フ試  
 金術ニ対スルモノニハ諸般ノ熔炉並ニ風炉ニ加フルニ各種ノ湿式装  
 置ヲ備フルヲ以テ諸金属ノ定量ヲ行フヲ得ヘク鉄試金術ニ対スルモ  
 ノモ亦各種ノ装置ヲ備フルヲ以テ鉄冶金ノ原料並ニ産出物ニ関スル  
 検定ヲ為スヲ得ヘシ瓦斯分析ニ対シテハゑらー、ういんどりなー式、  
 しょんどるふ、ぶろつくまん、どらいしゑる式及どれーしゆみつど  
 式等ノ装置及びとーと管並ニ煙塵定量器等ヲ備ヘ驗熱ニ対シテハわ  
 んなー式、ふゑりー式及る、しやてりゑー式等ノ高熱計並ニべるて  
 ろー、まーれる式、ふいつしやー式及ゆんける式等ノ火力計ヲ金属  
 組織ノ検定ニ対シテハまるてんす式及る、しやてりゑー式ノ檢鏡装  
 置等ヲ備フ

標本ハ諸鋸山又ハ工場ノ寄贈若クハ当教室ノ採集ニ係ルモノ多ク模  
 型ハげるすてんへーふあー式及うゑすとまん式焙焼炉、びるつ式高  
 炉、ばちんそん式脱銀鍋、独逸式分銀炉、蒼鉛絞床、亜鉛並ニ砒素  
 製煉炉、あんちもにー絞床、鉄高炉、鍊鉄反射炉、くーぱー式熱風  
 炉、こつぱー式骸炭炉等ニ過キササルモ其ノ欠クルモノニ対シテハ之  
 ヲ附近ニ於ケル実物見字ヲ以テ補フコト、セリ

実習及卒業論文 本学科ハ其ノ性質上実地ノ見字ヲ要スルコト甚切

ナリ幸ニ我カ大学ハ製煉所、金属山ノ如キヲ四隣ニ有スルニ依リ学  
 生ヲシテ是ニ就キ屢々見学実習セシメ以テ其ノ利ヲ享有セシメツ、  
 アリ而シテ第二学年ヲ終ルノ後七月ヨリ十月迄ノ間指定ノ鋸山若シ  
 クハ製煉所等ヲ見学セシメ其ノ報告ヲ徴シ並ニ卒業論文ヲ提出セシ  
 ム

○結論

本学各教室ノ設備現況大約上述ノ如ク教授亦諸般ノ施設ニ忙シクシ  
 テ全ク研究室裡ノ人タル能ハサル狀況ニアルモ此間ニ於ケル研究ノ  
 結果ハ既ニ紀要第一冊第一号トシテ発表セラレ近ク刊行セラルヘキ  
 第二号ノ準備亦既ニ成リ創設以來三星霜今ヤ第一回卒業生ヲ出スノ  
 機運ニ会セリ今後一層奮勵シテ教授研究両方面ノ努力ヲ怠ル無クン  
 ハ庶幾クハ以テ邦家ノ期待ニ負クナキヲ得ン乎

○学生及生徒ニ関スル諸表

九州帝国大学工科大学生生徒現在人員表（大正三年五月一日調）

種 別	学 生						生 徒	
	第 一 年	第 二 年	第 三 年	計	選 科	計		
土 木 工 学 科	一 五	一 一	一 二	三 八				
機 械 工 学 科	一 六	九	九	三 四	一	一		
電 気 工 学 科	一 九	一 七	一 二	四 八				
応 用 化 学 科	一 五	一 五	一 二	四 二				
採 鉱 学 科	△一 四	一 二	六	△三 二	一	一		
冶 金 学 科	一 一	六	五	二 二	一	一		
合 計	△九 一〇	七 〇	五 六	△二 二六	三	三		

備考 本表中△印ハ外国人

第二編 九州帝国大学の創立

奈良	栃木	茨城	千葉	群馬	埼玉	新潟	長崎	兵庫	神奈川	大坂	京都	東京	北海道	府県別		種別
														国別	学生	
				一			四			一		二		学生		土木工学科
														生徒		
														学生		機械工学科
一	一		二			二	一	一				四		生徒	一	
														学生		電気工学科
	一					一	一	一				三		生徒		
														学生		応用化学科
			一		二		一	一					二	生徒		
														学生		採鉱学科
			二								一	一		生徒		
	一				一	一		一		一	二	二		学生		冶金学科
														生徒		
一	三		五	一	三	四	七	四		二	三	一五	一	計		

九州帝国大学工科大学学生生徒府県国別人員表（大正三年五月一日調）

第一章 九州帝国大学創立への動き

島根	鳥取	富山	石川	福井	秋田	山形	青森	岩手	福島	宮城	長野	岐阜	滋賀	山梨	静岡	愛知	三重
				一		二		一		二	二				一	三	
											一		一			一	一
二	一	三					一	一		一	一	一				三	
			一						一	四		一				二	
	一		一					一	一	二						一	二
一										一	一				二	一	
三	二	三	二	一		二	一	三	二	一〇	五	二	一		三	一	三

第二編 九州帝国大学の創立

計	支那	沖縄	鹿児島	宮崎	熊本	佐賀	大分	福岡	高知	愛媛	香川	徳島	和歌山	山口	広島	岡山
三八			二		一		三	三					四	三	一	一
三四			一		四	三	二	五						一	二	
一																
四八			一		一	三	五	九		一	一			一	二	二
四二			一		四	三	一	一一					二	一	二	一
三三	一				三	二	三	九						二		
一																一
二二			一		一			三		一						一
一														一		
三三〇	一		六		一四	一一	一四	四〇		二	一		六	九	七	六

九州帝国大学工科大学生徒年齢別表（大正三年四月末日調）

種 別	学 生			徒 年		
	最 高	最 低	平 均	最 高	最 低	平 均
土 木 工 学 科	第一 年	二十一年七月	二十三年八月	二十三年五月		
	第二 年	二十九年四月	二十二年四月	二十四年七月		
	第三 年	三十一年	二十三年八月	二十六年九月		
機 械 工 学 科	第一 年	二十五年六月	二十一年三月	二十三年六月	三十一年六月	三十一年六月
	第二 年	二十六年五月	二十三年二月	二十五年四月		
	第三 年	二十七年二月	二十四年	二十五年		
電 気 工 学 科	第一 年	二十八年四月	二十年十月	二十三年六月		
	第二 年	二十六年七月	二十三年	二十四年八月		
	第三 年	三十一年	二十三年一月	二十五年七月		
応 用 化 学 科	第一 年	二十五年四月	二十一年四月	二十三年五月		
	第二 年	二十七年七月	二十二年四月	二十四年七月		
	第三 年	二十七年十月	二十三年十一月	二十五年七月		
採 鉱 学 科	第一 年	二十七年九月	二十二年一月	二十四年一月	二十四年八月	二十四年八月
	第二 年	二十七年四月	二十二年十一月	二十五年二月		
	第三 年	二十九年七月	二十四年三月	二十六年八月		
冶 金 学 科	第一 年	二十六年五月	二十二年	二十三年九月		
	第二 年	二十七年八月	二十二年七月	二十五年三月	二十六年十月	二十六年十月
	第三 年	二十九年八月	二十五年	二十六年七月		

九州帝国大学工科大学要覽終